麻生路郎主宰

川柳雜誌

九月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和十九年九月一日發行　第二十卷第九號（毎月一回發行）

柳珍堂忌

柳壇の先進故松村柳珍堂の十七回忌に相當するので令息松村旭氏及び故人の盟友川上日車氏の臨席を乞ふて柳珍堂忌を營むことになりました

日時　九月十四日（土）午後六時半

會場　川柳雜誌社會館

上本町四丁目バス停留所西へ半丁左に見える洋館

兼題「洋傘」三句　麻生路郎氏選

挨拶　松村旭氏

故人を偲びて　川上日車氏

麻生路郎氏

會費　30SEN

主催　川柳雜誌社

柳翁忌

日時　九月廿二日（火）午後六時半

會場　日本橋倶樂部

南區日本橋一交叉點北ノ辻東入南側

兼題「町內」三句　麻生路郎氏選

講演　柳翁を偲びて　麻生路郎氏

柳書に就いて　森東魚氏

路郎盃　兼題天位賞として路郎盃を授與（但し出席者に限る）

川柳マツチ　出席者全部に本社川柳マツチ（山本雨迷氏執筆を）呈上

會費　30SEN

主催　川柳雜誌社

本社關係句會

川柳雜誌社
今治支部創立

二週年記念大會

記念募集
熱　麻生路郎氏選
虫　增位汀柳氏選
露　前田五健氏選
恩人　酒井大樓氏選

兼題　今治支部選
現金　松山支部選
應援　西條支部選
凡人　（各位五句以內）

日時　九月八日（日）正午開會
會場　今治市大正通
　軍人會館樓上
〆切　九月一日（會費不要）
投句所　今治市米屋町一
　伊豫相互貯蓄銀行內
　會我部宵明宛

川柳作品展覽會

九月七、八の兩日廣小路越智ガクブチ店內で催しますから御覽下さい。

主催　川柳雜誌社今治支部

秋が—
僕の好きな秋が
庭の隅から
匐ひ寄つて來た

孔子園の書齋では
ちろりを抱いて
句に耽つてゐる

なあちろりこれから秋に親しまう

路郎

松山川柳慰靈祭句會

日時　九月二十三日夕五時
會場　松山市南堀端高野山
兼題　蜻蛉　麻生路郎氏選
〃　洋刀　前田五健氏選

川柳雜誌社
松江支部

五週年記念句募集

兼題　日本　麻生路郎先生選
〃　松　来村あん馬先生選
〃　手　田中都之介選
高點者に呈賞　〆切九月三十日
投句所
島根縣松江市雜賀橫濱町
梶谷巷二宛

主催　川柳雜誌社松江支部

○記念大會は十一月初句の豫定
詳細追而發表

〃　種子　酒井大樓氏選
追悼一句御願ひ申上ます
送句先　松山市日の出町九〇芝田靈子宛
兼題〆切　九月五日
當日會費二十錢　送句會費十錢

主催　松山川柳十日會

大阪朝報川柳會（第一回）

一日時　九月十日（火）午後六時
一會場　川柳雜誌社會館
兼題「色街」三句麻生路郎氏選
同「四ツ橋」三句增位汀柳氏選
會費二十錢
兼題席題の天位賞として粗賞を呈す

主催　大阪朝報社
後援　川柳雜誌社

大阪夕刊新聞川柳會（第一回）

一日時　九月十七日（火）午後六時
一會場　川柳雜誌社會館
兼題「北濱」三句　麻生路郎氏選
同「活字」三句　山本雨迷氏選
會費二十錢
兼題席題の天位賞として粗賞を呈す

主催　大阪夕刊新聞社
後援　川柳雜誌社

川柳雜誌第十二卷 第九號 目次

文苑

武玉川二篇研究（十七）……梅本秋の屋
明治以後の川柳年表（七）……森東魚
川柳指導講座（三）……西島〇丸
川柳指導講座（三）……川上三太郎
月評 街の高臺……路郎、艸樂、汀柳、春秋
當世不通漫談（二）……梅本塵山
四國遍路（其四）……酒井大樓
すひかづら……西田艸樂
一平のおとど……鍋平朝臣

ア・ラ・カルテ

臥床錄……山本丹路
川柳のたね……青木史呂
汗と蛭の手紙……金井有爲郎
盆踊り……前田義風子
川柳塔建立……西いわを
俳侶とみかん……辻いの助
秋風漫語……芋九羅男

創作

近作……麻生路郎…(四)
近作柳樽……麻生路部選…(五)
川柳塔……麻生路郎選…(三)
粒々集……鞍馬、柳秀…(一七)
柳風スポーツ……森東魚…(一)
日本名所名物川柳（東京の巻四）……前田雀郎選 宮尾しげを畫…(四三)
一路集……吉田水車選…(四八)
月時計……西村明珠選…(四九)
各地柳壇……路郎、艸樂、汀柳選…(五二)
柳界展望……(六〇)
川柳二十日會……世間音、豆秋、いわを、夢裡記…(五一)
川柳書架(五六)……編輯の窓……汀柳…(六四)
本社關係の人々……(六六)……本社句會案內……(一)
表紙題字……楢重……
表紙寫眞……假寓孔子園の庭にて麻生路郎主幹……

近作

麻生路郎

老眼と知りそめし日を宮仕へ

葉鶏頭畫の枕を胸へあて

赤心一票やりごころなし

人妻となつて卑怯な眼をつかひ

字をくづす稽古もしてる老博士

近作柳樽

路郎選

額の字を見てゝお通夜の眼がもたず	大阪	大門
小僧への電話向ひの小僧より	同	同
殘つてゝ景品係眠うなり	同	同
大空へ便所の蠅がとび去れり	同	同
決裂のあとにも椅子の向きあふて	同	同
外交は心齋橋を北へとり	同	同
面白く飲んでる膝の肉をみて	高知	星水
婦人會議事の捗る手を叩き	同	同
意見して序に申す事があり	同	同
蛇に似た眼で金策を請合はせ	神戸	久米雄
給水へバケツの列の亂れて來	同	同
言譯へ女コンパクトをのぞき	同	同

子の積木三階までは無事にたち　大阪　木圭
三階で看る照明の線を追ひ　同　同
療養所夕日の沈む島にあり　同　同
診察の順にグラビヤ嗅いでゐる　同　天國
夜ふかしの客を對手のアセチリン　同　同
職人の街にラヂオが鳴りつゞけ　同　同
法律を知らねばならぬ貸が出來　今治　文庫
風呂敷で凶作地から女來る　同　同
釣つてゐる背にノンキな人の垣　大阪　龜坊
戀知つて我が生活をうとんずる　同　同
苦勞性一ぱいのめば又惱み　今治　永治
涙なき男の肩のいかつてゐ　同　同
お坊つちやんですねと女給注いでくれ　大阪　寒草
月給は上らぬまゝの子煩惱　同　同
云ひつのる女房をさけて月を見る　伯耆　秀峰
お察しがどれもおんなじ悔狀　同　同
私生兒の死んで幸とも云われ　伊豫　京司
親しさに判をかりたるさびしさよ　同　同

見込まれて妾宅へ使に行くのです　松江　比呂志
酒は冷へて氣まづき二人となる　同　一更
肺三期鼻から咳を出しにけり　靈ケ池　同
血管のみゆる白さを寂しまれ　同　甘雨
終點のジョツキへ今日の苦を忘れ　芦屋

水害後に於ける某教授の説へ

學者又愚痴にも似たる説をはき　同
久しぶり君は母なり僕は父　大阪　玉葉
手土産は無沙汰をわびて用があり　同
値は値なり一度坐つて裾の皺　尼崎　觀月
その刹那神をおがんだにんげんよ　同
餞別の禮狀が來てそれつきり　廣島　芳泉
恐わ〳〵と娘は酒を受けこぼし　同
雨蛙それサボテンの針がある　今治　曉童
投げられた玩具がプロの叫びに似　同
扇風機無駄に廻つて床屋ひま　東京　史葉
女生徒の聲が大きい義捐金　同
浴衣縫ひくれし娘とする散歩　無鐵砲

遊びたい癖も似てゐる同い年　　同　立帆
汗の手に運命線の細きかな　　金澤　同
ヒステリツクの顔へ默つてゐるとしやう　　同　沐天
季すでにデツキチエヤーが邪魔がられ　　大阪　同
アパートにキヨロンと坐る故郷の父　　同　九葉
事務机思想を持たぬ勤めする　　神戸　同
梅雨の候それからさきは無心狀　　同　蘇堂
娘居てゲルベゾルテも賣れるなり　　同　同
齒醫者まだ釣魚の話に夢中なり　　石川　義風子
博士論文の材料とは患者知らず　　同　同
例外もあります醫師の言葉尻　　同　三男坊
病院の眞白きものゝ淋しくて　　大阪　同
お隣は退院今日も日が沈む　　同　彩泡
處女會を退く日鏡を贈られる　　同　同
紺かすり巡査にまけぬ口を利き　　愛媛　孤鶴
工事場に着物を着たは病上り　　同　同
履歷書の事には觸れず茶器を褒め　　神戸　木履
食堂は夏の陣なりソーダ水

バツクミラー男の腕が氣に懸り　大阪　同
神秘とは水の色かも木の葉うく　水客
一二回牌を並べて藝妓去に　同
ゴールインどれも見られた顏でなし　石川　しとし
榮轉が出來て筆禍の面白し　同
霧の中巡査こくめいに歩いてる　大阪　紫香
子供等は蛙の腹をうれしがり　同
雨宿りするにデパートイラツシヤイ　十三　牧人
いとはんは女中に泳ぎ拔かれたり　同
利子だけで食へる身分よ犬を飼ひ　廣島　馬占山
祖母と寢る年兒の兄をいとほしみ　同
コンパクトは無言の挨拶をする　大阪　やすを
戀もないビールの泡を見てゐたり　同
人間の此んなに死んだ墓場なり　今治　小樓
兄弟喧嘩をみてゐる僕はみなし子　同
水兵の便り港々の女なり　大阪　住雄
診察券捨てるに惜しい期限有り　同
ろくでもない又緣談か伯父の下駄　松江　圭之介

値切るのが嫌ひマダムの御買物　同　今治　心
氣にくわぬ時は知らぬととぼけとき　府　同
女給また何の金だか預けに來　川柳　好　郎
なにもなしこのまんげつの靜かさよ　同　大和　峯
このごろのこころへふくかぜちと甘し　同　神戸　木　通
一人子に一ぺんきりの物を買ひ　同　同　勝　美
愛嬌のこれも一つの醫師でない　同　金澤　柳之助
魂を對象にする國訛り　同　島根　朴　泉
織細な感情火消し壺の蓋　同　松江　讓　二
鬪病の心草花に趣味を持ち　同　石川　水　樓
生活の汽笛が淋しい水まくら
張板を叩く娘に隙もなく
ニコチンの指へ想ひがまた亂れ
お月樣私一人でゐたいのよ
トマト畑に女まろかな夢をもち
しんとして麻雀荘は眞晝間
朝顏は老妓の日參知つてゐる
丸まげの一層きれいな籠越

浮世繪の様に簾へ居崩れる　同
醉ふて行く質屋に青い番頭ゐる　加古川　天秋
八疊に大の字に寢て淋しがり　同
扇風機だけがサービスしてゐます　伯香　少年けんじ
大賣出し貰つた團扇を腰にさし　同
明日まで借す拾圓に泣かされる　大阪　滿潮
ヴアイオリン若奥様のお部屋です　同
銀行のソフアでお襁褓を替へてゐる　神戸　勝太郎
大金庫ばくんとあいてゐて眞晝　同
惡友の結果がこわい別れ際　名古屋　世香
ポストまで派手な蛇の目のさしぐはい　同
甘えて見すねて見妻の日の長さ　今治　一風
倫落の女煙草を耳にはせ　同
愛のさゝやき香水も褒められる　京都　白英
結婚のそれから生花のたへぬ家　同
肩揚げは人妻でないしるしだけ　大阪　利生
嘘ついて子供にぴしやりたゝかれる　同
色街の話がうまい寺男　神戸　朝雨

死ぬと云ふ言葉の端にある自嘲
ビルの影退社間近なとこへ延び
王手飛車打つ手へ燗が出來ました
恐れとはいかなるものぞ醉ひ知れて
見渡せばビールの泡とさゝやきと
看護婦の美談血液型が合ひ
トラックのせめて左遷は派手に積み
また一人逝てアルバムペンを入れ
髪きつて療養するときめた夏
錢入を忘れて出た日氣が弱し
ランデブー蚊に攻められて歩るき出し
注射器のつめたきひかり淋しき日
口覆ふて面會さんが二三人
非常時に天元と言ふ布石あり
エゴイスト汝は耳が遠い也
愚痴云ふな莨が灰になるばかり
商談へ朝日一本づゝ抜かれ
子守唄もう母ちやん歸る頃

同　天風子
同　山刺紅
同　柳兒
同　よしろ
同　雅星
同　美智子
同　葉光
同　庄介
同　いの助
同　笑朗

（同／西ノ宮／長野／豊ケ池／大阪／豊ケ池／大阪／松江／大阪／灘川）

警官の服が五月をあつくする　今治　都留逸子
本當の親なればこそ膝で泣き　廣島　都正雄
伸屋がまだ食つて行ける町の幅　尼崎　柳愚
さびしさにビールの泡を吹いてみる　島根　梵人
青畳白足袋滑り相に立ち　名古屋　蕪村
水銀の高さを女秘書聞かれ　同　龍鳳
枇杷の實の甘さへビールの泡がきへ　鹽川　大朗
リユクサツツク汗の泌む眼で振り仰ぎ　奈良　葉魚
スポーツ欄今朝もワセダが勝つてゐる　大阪　伊佐緒
五圓札折目のつかぬのし袋　柏原　公子
新築の家見て未來描くなり　金澤　涙笑
ふんわりと尻を下した絹蒲團　松江　月山
いゝ身なり皆んな圓タク止まつてき　東京　吾一
唇を噛んで男に生れたる　大阪　源太
嗚呼罪なき者彼を打てとあり　蛍ケ池　浮鬼
憂鬱は海の青さがあるばかり　大阪　雨舟
大ぎやうに夕顏ほめてもらい風呂　同　美代路
半分は諦めてゐる療養所　蛍ケ池　猪の佳

終電車乗越しらしい眼で訊かれ　大阪　正一
夏の夜具外から見えるとこへ敷き　同　花鳥
日曜の圓タクむつとさせて行き　東京　四塊
醉うてゐた電話の續きから訊かれ　高知　水魚
自惚が強い女の淋しい日　松江　登美也
血を喀いて詩人戀愛至上主義　大阪　破鼓
退院の日の麥の色妻の顏　伯耆　小判

劇場見物

むらさきの煙の中に戀がある　筑ケ池　万太郎
亡き友のベツトに眸おちてゐる　同　としを
病んだ身へポツリ椿が一つ落ち　一宮　美津女
女氣がなうて露骨な涼み臺　神戸　獨歩
大阪で遊ぶプランの絽の財布　同　双亭
履歷書を賴む足先しびれくる　大阪　歌都路
帶解いて受診の人へ河鹿鳴き　高松　柳夢
利權屋のくづれかけんとする胡座　東京　梟人
タイピスト課長の稚氣をふと見付け　金澤　今雨
石像に變り果てたる人格や　松江　よしみ

寄席の顔笑ふチヤンスが生地を剝く　東京　不二號
水臭い親類共よ戰はん　京都　丁路
お別れに夏草ふんで語りけり　奈良　千畦
ニキビ出た眼鏡かけたくなつて來た　愛々池　柳太郎
ひとのみち職なき學士行きてみぬ　大阪　梢雨
何氣なく見つめたとこに戀の影　札幌　非常兒
行狀をちつとつゝしむ隣出來　神戸　浦人
ぬかるみへ一歩二歩ゆく戀のわな　今治　藤生
渡されし包の中に主婦の友　伊豫　富美女
植付けがすめば〳〵のうれしさよ　讃川　健芳
獨身者今朝出たままに本があり　大阪　千鳥改　郡鳥
手料理に苦情もつけて倦怠期　同　つと夢
あるいて歩いて二人の夜のみち　同　晴夫

全國中等野球大會

これだけの人どう歸る甲子園　同　都會人
子の處作をいちいちほめる夜の膳　同　四五磨
夏になり夏着るものを考へる　同　品子
お師匠が得心をする腕となり　名古屋　嵜喜固蘊

蓮の葉に露のはかなき團結よ　大阪　徳三
世帯苦の醉がみじめなコップ酒　同　寛水
同郷の給仕したたしい返事する　神戸　吉左右
ピストンへ同じ構へでけしをかけ　名古屋　彌世子
自動車を嫌ふた母の靈柩車　大阪　鈍魚
それからは貫一つあんの非人情　市本　晴二
死ぬ迄はやつぱり苦勞するものよ　大阪　哲平
金策へ本を賣るより智惠がなし　今治　伶人
結婚と言ふ生き方もありました　同　輝親
本棚の整理がついて夏休み　大阪　勇
ウインドへ立つ順禮の身つくろい　西宮　三代吉
チヨコレート噛つてどうでもいゝ勤め　松江　山川兒
あきらめて笑ひませうよ牡丹刷毛　同　笑鬼
入齒して一つの舌の置きところ　鐘川　章泉
全快の頃里の母邪魔がられ　大阪　世間音
弄ぶ疾風に蜘蛛の忙がしき　奈良　葉魚
熟睡の病兒餘病が恐くなり　東京　丹三郎
青疊精一ぱいののびをする　大阪　品子

美やまれるほどの花輪へ若死　東京　樂天坊
ピクニツク若草ふみて唄になり　靜川　笑朗

病床久しく

食慾のない瞳に乳の瓶二本　千原山　狂鬼
御隱居は死んでるやうに晝の風呂　大阪　美代路
こらへてる强さへ俺は聲も出づ　島根　雨丹

ラヂオで佛法僧の鳴き聲を聞く

佛法僧ラヂオに鳴いて夜が更け　大阪　一寸坊
敷臺へ置く迄に取る折鞄　同　節子
熱帶魚龍宮城を思はせる　名古屋　嵜喜固藟
サーカスも引上げて行く雨續く　奈良　双亭

川柳指導講座

選者　川上三太郎氏

課題　『動物を愛する心』　一人一句

諸君の可愛い〳〵犬、猫、鳥等、等、等、それを十七字見當で禮讃してやつて下さい。

〆切　九月二十日　發表　十一月號　投句　本社事務所

武玉川二篇研究（一七）

梅本秋の屋
森東魚
姪子省二

(484) **春に似た日も十日ほと八手咲**

秋の屋＝春に似た日は、所謂小春日和で、その暖氣につれて、八手（漢名、八角金盤、又、八金盤）の花がさいたと也。

東魚＝十日程の僅な溫い日の間に、八ツ手の花が咲いた、と云ふ點に寧ろ冬のわびしさが思はれる句である。

省二＝十月に白い花が咲き毒ありといふ。黒色の實が生る。冬も落ちない葉が偉大すぎて花は淋しい。「八日吹の風よちらすな八手花」。一老人の話に、玄關先に八手が植へてあつたら、今の者は何にも知らぬワイ。八手は厠の傍に植へるものだ、などと云ふ。

(485) **言せて置けは傾城はなし**

省二＝判然と說明しにくい句だ。勝手な熱を吐かせて置くと、マア吉原には、らしい傾城はないんだネ、などと若者の怪氣焰でもあるか。

秋の屋＝傾城が氣焰を吐く、と云ふのでも無いらしい。明解を下し難い句である。

東魚＝姪子氏の說のやうにも考へられる。

(486) **くほく見られてつふぬれて行**

省二＝「なぜくぼく見たと天秤際へより」の如く、「くほく見る」は輕蔑される事。雨やどりをして居ると、いやみなど言はれたりする事のあるもの、づぶ濡れ覺悟で出て

ゆく。

秋の屋＝雨舎りをした其宿の主人が、冷眼で蔑視して、何か當附けがましい事を云つた故、其處を出て行くのであらう。

東　魚＝駕籠がないわけぢやなし、などと云はれたのかもしれない。

(487) **よいおとこ惡い男に逆かくれ**

省　二＝よい男は情夫。惡い男の惡情けに、逆げかくれしつゝ逢ふ瀬をたのしむ。

秋の屋＝惡い男とは、容貌の醜い男のことで、惡意のあるのではない。

東　魚＝これは女敵討の句だと思ふ。間男をされる方は大概醜い。姦夫は良い男と相場がきまつてゐる。

(488) **手代へ錠をおろす高聲**

省　二＝手代が何にか不始末をしたので堅く訓戒される例へば「范蠡がねしから越の手代ぬけ」の如きが、近因遠因をなすかもしれぬ。「錠を下す」は心を堅固にさせるの謂ひ。

秋の屋＝遊廓行を訓戒する而已でなく、勤務上の手薄などを戒飭するのであらう。

東　魚＝錠を下ろすと云ふ言葉を、面白く働かせた處が主眼である。

(489) **反橋を先へ渡て口を利**

省　二＝小供や女がやる。先きに渡つた興味の表示だ。丸木橋でもよいが、反橋の方が背景もよく愛嬌も感ぜられる。

秋の屋＝橋を渡る間は危いので無言だが、既に渡り了ると急に口が利かれる。

東　魚＝渡り得てホツとした心持ちがよく出てゐる。面白い。

(490) **三味線免す親のあやまり**

省　二＝何にか一つ位趣味的な道樂があつても却てよからうと、息子の言ふがまゝに三味線の稽古を許したのが因をなし、大變な道樂者になつてしまふ。よく聞く事だ。——遂には藝は身を助けるなどの、なれの果などの話も聞く。

秋の屋＝江戸時代の女子は、貧富の別無く、三絃の稽古をさせたものであるから、これを免すといふのは息子に相違ない。

東　魚＝息子說に贊成。

(491) **母も內證は知て褒る金**

省　二＝到庭返つてくる金ではないと、內々用途を知りつゝ要求通り應じてやる。「內證」とあるから相手はドラ息子ならむ。

秋の屋＝金を寝かすといふのは、貨幣を死藏する事で、父が金をねかす内證の事情は、母もよく承知してゐると云ふのである。

東　魚＝「寝る途は省二氏の様に、回收出來ぬ金、固定してしまふ金といふ意にも解せられると思ふ。充分句意は分らない。

(492) **質屋の口をとめる束帶**

省　二＝束帶の質入れ、隨分せつば詰つた上であらう。束帶とはネ。口とめをするも道理。

秋の屋＝束帶を持つてゐる人は、身分のある者であるから、これを質に入れた事を、他に漏らしてくれるな、と口留するといふのであるが、束帶を質草にするなどといふ事實は決して無いことゝ思ふ。

東　魚＝公家の貧乏を揶揄したのであらう。

(493) **門跡へ向く大舟の尻**

省　二＝築地本願寺の事か。江戸名所圖會の寒橋の繪をみても、西本願寺がみへて、下部に船が描いてある。佃島など思合して出來た句か。

秋の屋＝前說の如く築地の西本願寺である。

東　魚＝佛様の方へ尻を向けたと云ふ處が、山であらう

(494) **生れた事は譽ぬ晴天**

省　二＝初篇には「世の譽事の晴天に死」があつた。死むだ時と生れた時との差が味ひ得らる。

秋の屋＝赤子の誕生は、全く晴雨に關係がない。

東　魚＝弔の晴天は、佛の餘德を讃へるのが例であるがと云ふ心持ちが陰にある。

(495) **二親も背中へは手の屆かね**

省　二＝二親の油斷から、背後に出來事が生じたのであらう。(例へば娘の背後に問題が起つたとでも云ふ如く)。

秋の屋＝娘の背後まで云はずとも宣からう。

東　魚＝これも場合が分明しない。子に盡す兩親にもやはりぬかりはあると云ふ心持ちだけであらう。唄の文句に「起請せい紙を背中にかき」と云ふのがあるらしいから、そんな事を匂はしてゐるのかも知れない。

(496) **衣着て見る孫のよめ入**

省　二＝孫の嫁入では大隱居様だ。「衣着て」の感じは時代の推移した今日では、解しにくいところ。

秋の屋＝圓頂黑衣の樂隱居。現代に於ては稀にも看られぬ圖である。

東　魚＝私の妻の祖母は得度して居た。衣こそ着てゐなかつたがこの句の心持ちその儘である。面白い句である。

(597) **朝貞のかき廻さるる奈良の町**

省　二＝奈良は早起の風習があつたから、早朝觀賞さるべき朝顏を持出したのである。

秋の屋＝例の神鹿が、朝顏を蹂躙するのであらう。

東　魚＝朝の早いのは朝顏の獨占ではない、奈良は人間も朝早いぞ、と云ふのを「かき廻さるゝ」と可笑しく詠だのであらう。

(498) **妻のゑくぼの段々に減**

省　二＝世帶づかれも加はり、一年〳〵と老いては痩せもつき、靨も自ら消へてしまふ。

秋の屋＝靨が減ると反比例に皺が加はる。

東　魚＝同感、苦笑。

(499) **居たたけの低い口よせ**

省　二＝口寄せなどは丈けの高い大女では感じが應はしくない。坐つて低い方が、いと哀れな聲を出したりするに凄ご味も加はる。

秋の屋＝巫女などゝいふものは、身體の強大な者よりも弱少な者の方が、神祕的で人に信ぜられるのであらう。

東　魚＝小柄でもあり且、うつむき膝に居る姿が想像される。この句も面白い。

(500) **若衆の髷をとる雨たれ**

省　二＝情調に富むで居る句、雨だれのすべるのも纖細な感じだ。例へば芳町風趣としても浮世繪ものだ。

秋の屋＝若衆髷の突出した髷に、軒の雨滴が落ちて辷るといふので、強いて芳町の野郎とするにも及ばぬと思ふ。芳町の陰間は女裝してゐた。

東　魚＝若衆にして又格別の趣がある。

(501) **二三疊雀目の闇は日か殘り**

省　二＝未だ二三疊日が殘つて居るのであるが、もう見えぬ。淋しい感じがする。（トリメは雀目、夜盲、鷄盲、を色々書き方がある。本多氏の中國歷史考を讀むでゐたら次ぎの記事があつた。―「夜盲症には俗にとり目とは云ふものゝ、眼科全書によれば高風雀目內障と肝虛鷄盲內障との二種あることが述べられてゐる。即ち、鷄盲と雀目とは同じからず、雨時の黃昏にいたつて物を見ず、燈火を點ずる時にいたつて又物を見る、これを鷄盲と云ひ、反對に黃昏には物を見て、燈火を點ずる時全く物を見ざる、これを雀目といふ」。

秋の屋＝坐敷の奥の方は夕闇が迫り、前の方は斜陽の光が殘つてゐる。

東　魚＝「日が殘り」に「とり目」のあはれさが思はれる。

川柳塔

路郎選

増位汀柳

法の道われに恥づべきこと多くありのまゝ語る人なし眼をとぢる

金持の子が先生に手を曳かれ検温器ぽきりと折つて仕舞たし

飛び込めば心中となる橋にかぜ

靴までもかなしげに鳴る逢へぬ夜のそうろうと歩みて酒の家に着き

山本丹路

小康の花瓶の位置を正しうす

母親は出世の夢をまだ捨てず

土民等は裸足に銃を擔ふてふ

夕涼み鼻緒が何となく切れた

生活へ戀愛へビールの泡しとど

さびしくも第二夫人として名あり

ならぶ鏡臺ならぶおしろい夜が來た

夏の夜のさびしさ赤き妓たち

子は親の趣味を解せず紺絣

生田翠夢

情慾の一歩手前の唇の色
貞操を侮どる程に廓なれて
秋の風惱みを消すにいとまなく
盆踊り月があるのでいたにつき

水谷鮎美

怪談にサンドイツチの唇をふく
まごころのさびしすぎたるわかれかな
おみやげの露のいのちの螢籠
さびしさの屏風へかぜがあるばかり
太陽の直射修養團の子ら
蟹の泡陽にきへたりきものあはれ
二三日恩に被てゐるおもしろさ
花剪つて供へ阿彌陀の字を讀みぬ

西村明珠

朝の門庭木の枯れを話し出る
大臣と一字違ふた名を惜しみ
秋風が帽子洗ひにむごく吹き
月給を待つて死を待つにも似たり
孝行をしたいある日のてれくさゝ
開業のビラは左の手でほかし
子や家を思へば胸を撫ぜて置く
かつがれて寄附金よせる事となり
悲しさに口きけるのも年のせい
落ちぶれて乳母も長屋に老いて行き
六十が四十にまだお若いといふ

尼綠之助

油流して出雲二見が壞れゆく

西いわを

目算があるわけでなく空地なり
昵懇の間柄なり靴屋なり
教習所攝氏三十五度の夜
開襟で今日も四五軒廻つて來
經本は電車の中も離さない
三十才エコノミストを積重ね
住友に債權のある一人です

伊東ハンニ氏

ハンニズム相場欄から眼をそらし

平井與三郎

魔窟は明けて酒に痛めし體を起す
玉の井の窓から太陽が爛れてる
母一人土佐の小島に待つ娼婦

朝田新水

洗濯が好きな女房に脫がされる
儲からぬ日とてもコーヒだけは呑み
化粧代その月給が疑はれ
東西南北これが最後の地とは知り
カルモチン弱い男を寢かせとき
どうせ女と約束を違へ
みつ豆の戀がはたして成立し
圍はれの身にはやさしき京訛り
寄附強請銅貨で渡す氣にもなり

中澤濁水

政治家とうなづかさせる宿の額
氷水飲んでる途端汽車の音
太洋をはるか見下す夏の汽車

石曾根民郎

友人K君逝く一句

骨壺の相そのまま極楽ぞ
はかなさに觸れて圖雲眸にいたし
さかづきはかわくともせず世をうつし
リュックサック重いこころを捨ててきた
世にうとき横顔妻は見てとつた
新妻に蚊が鳴いてゆく愉しさよ
やせ腕に鳥影おとし過ぎゆくよ
群衆の歡呼に入齒うごかした

竹内機見女

大阪の灯はあのあたり天の川
空青くふるさとの味水の味
ムーン・ルームと名づけねむらせず

喜多春秋

アナウンサヒツト〳〵と夏の聲
ございませんかせんかとバスのアクセント
眼へ持つて行つてうなづく近視眼
たばこすふひとゝきのゆめぼくのゆめ
あんな奴と女が云ふてゐる頃だ
わが心雨はしみ〳〵土へ降る
一派あつて社會の隅を濁してゐ

曾我部宵明

妹逝く二句

白い手甲大師のみ手を放すなよ
その朝のアイスケーキが間に合はず
何何會痩せる藥を紹介し
夜ともなれば隔離病舍の灯が奇麗
横ちびた靴停年を淋しくす

吉田水車

聞かされてまだ其の上に拂はされ
テナーまた欠伸のやうなのも唄ひ
ショウウインド肥えた人形はなかりけり
カフエーは今日も涼んだまゝですみ
ゆめうつつのまどにけむりもまつすぐだ
日記今發心ほどの覺悟にて
一應は女女に同情し

岡崎祥月

沖へ沖へ君は一體死ぬる氣か

滿蒙の友に一句

高粱は伸びる教育研究所

國澤春水

荷を運ぶだけの俥夫とはなりにけり
みどり丸少し刺戟があつただけ

後藤青兒

雜草の中に道あり腦病院
朝顏がしぼみ離緣の事で來る
全快にまだ程遠い壁の色
シンシ張り裏返つてるプラタナス

宮岡白峯

大峯山西のぞきにて一句

合掌へ人間だつた君若し
狼の話も洞川迄つづき
おかみそり晒母親死ぬつもり

荒井英賀夫

米の値も知らず豆腐の値も知らず
負けおしみ金をくさしてみたものの
カロリーと別にテキも好きカツも好き

市場沒食子

注ぎたした資本は里の親から出
笑はしに來いとは寂しい言付よ

亡弟一週忌

人手にも渡らず工場煙を上げ

青木史呂

似顔書きやはりサインをしとくなり
女給から暑中見舞が屆くなり

奥野禿山

ハーモニカ小遣錢が足らぬらし
催促を派手に斷はる自前の妓

米田まさる

手をあてゝお寺の鐘を聞くも秋

粒々集

東京　富士野鞍馬

隱居所はブン〳〵時計がよいといふ
一週忌葬式の日を思ふなり
雨續き箱根の豫定忘れられ
酒の家吉井勇の來るところ

御影　長崎柳秀

父の借返さぬ腹でないけれど
會うにつけ別れるにつけ酒が要り
落ぶれて居ても男は男なり
合格の無心のうれし父と母
どこか見たお顏と仲居酌いでくれ
仕立屋の師匠の居ないにぎやかさ
發車べる危いと云ふ手を離し

葭乃さんへ送る

―川柳指導講座「わが生活」講評―

川上三太郎

……A……

葭乃さん――。

御無沙汰してます。いや本當は御無沙汰をしちやゐないんです。毎年大阪へ行つてるんですから。今年だつて行きました。ところがそつちへ行くと何時も市内で友だちに引張つちまつて――その中に大概麻生君もゐます。さうして醉しれた午前二時頃あなたに電話をかけます。

「何うも遲くなつて――御無沙汰致しました皆さんおたつしやですか、有難う」（一寸も文句になつとらん）

「えゝ有難う。御愉快らしいんですね。そこがお倦きになつたら家へいらつしやい」こんな新聞小說の返事みたいなんぢやない、もつと純粹の大阪辯でたとへば花王バートみたいにする〳〵と出て來るのである）

然し結局は矢張り御無沙汰です。大體電話で聲だけで物を言つたり答へたりするのは、會話ぢやない。顏のない會話なんてものはジヨセフインベーカーの居ない黑ん坊みたいなものである。

「三太郎はんはお酒飮まんと實に詰らんアホみたいな人や――」

と平生あなたは仰言つてるさうですが、素面の僕でさへ「詰らんアホ」である。況や顏のない電話の胴間聲だけに於てをや――で。

下らない事を長々と述べたやうですが、これが今月の課題「わが生活」の前奏曲になるんです。要するに「電話」では僕の生活がありません。今月の「わが生活」の集句中、僕の「顏のない會話」のやうな句がありはしないでせうか。いま恰度十九日の午前二時です。十八日の僕の句會から歸りに一寸一杯飮つて歸宅風呂に入つて机に向つたんです。靜かな夜で電燈が蠟燭みたいにジーッと音を立てゝ更けてゆくやうです。

……B……

葭乃さん――。

この春大阪へ行つた時、初めて御社の同人

住田亂馳君の夫人にお合ひしました。魚崎の住田邸に車が着いたのは、夜半の一時すぎでした。然かもその時僕は蒼々朦朧、頭髪悉く逆立つて居りましたから、深夜こんな怪物を愛妻に會はせるデはないと考へたのでせう、住田君は夫人に會はせませんでした。然し結局それは住田君の麻雀の如き休むに似たる下手な考で、翌朝威なくして猛きのみの僕の風貌を見た時の夫人は矢張りノケ反らんばかりにコワがりました。爾來この恐迫觀念は絶えず夫人の胸を去來してゐたらしく、ビール壜を捧げて座敷へ入つて來るその風姿も、何だか酒呑童子の前へ出て來る緋の袴みたいで僕はフトこの時夫人を佛蘭西製の日本人形だと感じました。その座つた時の足の出しかたなんかも西洋紙で折つた紙鑵でした（このベッテイカミビキナに幸あれ）

さて住田夫人が陳腐にして僭越なる僕の饒舌を許して呉れるならば、厚顔なる僕は更に麻生夫人に對して、あなたは川柳のおばさんであると言ひたい。そしてまたあなた位「わが生活」を句にしてゐる人はありません。と言ひたい。

飲んでほしやめてもほしい酒を注ぎ

浴槽へずらり立つたは　皆わが子

生活がこの位句になる事、その幾つかの苦業の層が重なつた迫力それを今月の「わが生活」の投句者諸君に傳へたかつたので、これを書き始めたのです。但し更に

客に合はすレベルピアノのキイのごと

こんなコワイみたいなおばさんである事もついでに教えたいために。

……C……

「わが生活」の集句中に

みなし子の或る日他人に羨やまれ

といふのがありました。（「或る日」は或日「羨やまれ」は「羨まれ」と書くのが正しいのです）句主が本當に孤兒であるなら、僕はもつと内面的なものが欲しいのです。これでは孤兒ではない僕でも出來さうですし、第一句材が餘りにだしぬけです。何か「あぶらだかぶらの呪文」みたいなと言へば少し誇張に失しますが、もう少し了解（アンダスタンディング）させて貰ひたいのです。それに何と言つても表現が概念的である事は否めません。それからこれは甚だ些事ですが、この句主は特に變名でこの講座に投句してゐるのではないでせうか。萬一さうだつたら、それは餘計な心づかひです。僕はたとへ岸本水府君が投句されても、本誌の麻生君が投吟されても、言ふ事は遠慮なく言ふのですから、諸君は出來るだけ率直に敢然と川柳すべきです但しこの句主はさうでなかつたのなら御免下さい。僕亦率直に頓首してこれは他の一番三太郎をなぶつて變名で出したろかといふやうな事を考へてゐる人たちへの言葉に振替へます。（句主今治草原蛇之助君）

人らしう生活せば白い瞳で見られ

「生活せば」と書いて「くらせば」と讀ませるのは、僕の好みから言へばイヤで、僕なら假名で「くらせば」と書きます。「白い瞳」も「白い眼」と書きます。然しまあそんな事はどうでも好いとして、この句も前の句と同じやうに暗語めいてゐます。解らない句ではありませんが、僕の舊作に

正直のあたまへ近所奠迦を　附け

といふのがありますけれ共、句主は僕と同一句材を正面から主觀的に詠まうとしたのです。斯ういふ場合に僕が欲しいのはこの「人

らしう生活せば——といふその生活は一體どんな生活であるかといふ事で、それを是非句に表現して貰ひたいのです。この生活が筆屋幸兵衛のやうなのか、堀川の與次郎のやうなのか、ミゼラブルのジヤンのやうなのか、ズーデルマンの憂愁夫人のやうなのか、はたまた印度のガンヂーのやうなのか。（句主大阪世間普君）

生活が女房慾しい炊事なり

「慾しい」は「欲しい」でせう、幾度も言つてます。誤字を書くのは選者には失禮ですし、自分には自句を愛さない事になります。投句は必ずポストの前で一度讀み直して下さい。と言ひたいのです。

こほろぎよ私も蚊帳で起きてゐる

と川柳のおばさんが言つてる通り、僕も亦諸君の句を見るために午前三時に近き深夜、虫聲を耳に膝を揃へて獨りペンを握つてゐるのです。その苦勞を考へて貰へば、誤字なんか一寸書けない筈です——なんて少し愚痴になりましたな。意氣消沈は禁物です。ところでこの句主ですがこの句主はまだ初心らしいです。然し僕は亦斯ういふ稚拙な句が投吟されて來る事が嬉しいのです。表現が途徹もなくガタピシしてゐるのも二三年の努力でなほりませう。この句主よ君は二三年締つてもう一度この雜誌を出してこゝのところを讀んで下さい。僕のガタピシと言つた意味を屹度合點して微苦笑するに違ひありませんから。（句主大阪加茂孟浪子君）

……D……

螢ヶ池から二三の投句があります。

A、生きながら諦めてゐる療養所
B、働いた寢息へ風鈴鳴つてゐる
C、食つては寢て動けば熱のでる三年

僕は螢ヶ池といふ所を知りませんし、そこの諸君の生活も解りませんが、石森靜太郎君なんかの句を透して、あらかたの感じは受取れます。その意味で言ひますとAの句は表現が亂りすぎて内容にタッチがありません。（句主米田まさる君）もつと句主の墨色が欲しいです。Bの句は恐らく過ぎた生活ではないでせうか。それに常套主觀で安易です。（句主植田義隆君）Cの句にやゝピリゝとしたものを感じますが、これだけでは散文的ですもつと句主の持つてゐるメスを働かせて下さい。（句主片岡善朗君）

○

もうそろ〳〵時間が來たやうです。僕も少し疲れました。然し麻生君が最近「手」を「足」にして働いてゐる事を思ふと、こんな事ではいけないと思ひます。

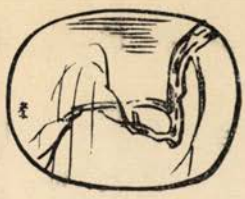
鶯馬に鞭ち子を學校へやる

麻生君のこの句を見た時、僕はこゝに生活を眞向から川柳してゐる人間に、麻生君が居たと泌々感じた事です。

そもや僕等に一番大切なものは情熱でせうこの蒼白な怪しき光は、僕等をロマンの國に誘ひ、アヴエンチユールの斷崖に立たせる。情熱なくんば人の世は灰の城そこには、映畫「外人部隊」のラストのやうな、はかなく崩折れたトランプの一組があるばかりである、かるが故に僕が大阪へ行くと、何時でも二十四五時間打つ通しの夜もなく晝もない世界になつて、情熱の化生そのものに成りはつるのである。

川柳のおばさん——また電話をかけます。

頓首。



一平のおとゞ

鍋平朝臣

次の一文は本社客員大道弘雄氏が五六年前川上日車氏に與へた紹介狀です。宛名が同じく客員の岡本一平氏であるのも面白いし、日車氏の一面がよく出てゐるので、同氏に乞ふて發表することにした。（路）

橘屋のかきづふし見たいな顏だから或は一寸位君の頭の底に記憶が殘つてゐるかもしれないが、この人は「川上日車」といふ新しい俳人で、それよりか新派の川柳家としては大家の一人だ。その羽左衛門にそんならどこで會つた？といふと憶へば古い昔ばなし、まづ聞かつしやれ！　たしか君がはじめて「八千代」に會つた時だつたか、西照庵に泊つてゐた、田崎のテツ公と三人で福丸家へ行つたつけ。その時かどうかはつきり覺えてゐないがそこではからず會つたのがこのタチバナ屋と鬼史といふ、今はもう故人になつたが、子規門下の鬼才といはれた俳人、それに大阪で名高い辯護士で俳名を「丈千」といふ石黑行平君といふよりか「日淸談判破裂して」の古軍歌や「道は六百八十里」の軍歌を作つた昔の大衆詩人と會つた、打連れて堀江の「一力」といふお茶屋へ行き、丈千翁が子供の御土產にともつてゐた「ドラ燒」の金具でウドン粉で君が似顏繪を燒き、それから更に向岸新町「白石」に陣を改めて痛飲誰やらがはじめて「ザコネ」をして珍談を殘したことを思ひ出したか。も一つその時どうしたわけか、君が急に怒り出してその「鬼史」を柔術の一手で見事に往來で投出した逸話もある。その投げられた鬼史はもう鬼籍に入つたが、そのときハラ〳〵してゐた鼠の殿樣のやうなエセ羽左衛門はその後鄕里へ歸つて「太湖」といふ氣のきいた小册子を編輯してゐる。あれからもう十二三年以上にもなるから、小羽左衛門も頭に霜をいたゞいて比良や伊吹と白さを爭ふやうになつたが、こたびおらに消息して「一平先生近く近江路に入るとかや、ついては久々で會ひたいが、面識ある筈なれどもう忘れてゐられることゝ思ふから一つ紹介狀を願ふ」とのこと、おらの頭にも「ドラ燒で似顏の件、廓の夜半うどんの立食をして柔道の稽古をした件、「ざこね」で一妓にある質問をした件等々がそれからそれへと想ひ出されて來る。小羽左衛門も昔はよく飮んで「ヘド」を吐いたものだが、この頃はどうか知らぬ、一平大人は今は一ペイもやらないから、まづ柔術のお手並を見せられる氣づかひはないと思ふが、とに角まあ忙しからうが會つてやつてくれ玉へ、但しやはらの手だけは夢にもお出したまひそ！

八月二十二日

大阪天滿の里

鍋平朝臣

岡本一平のおとゞ殿

明治以後の川柳年表

（柳誌柳書の巻）

（その七）

西島〇丸

（書名、誌名）	（發行年月日）	（發行所其の他）
上野文學第一號	（明治卅七年甲辰十一月廿五日）	東京、日本橋區本銀町四の五、帶都社上野公園三宜亭田村西男編輯、菊十六頁、休刊期不明
川柳現代第一號	（明治四十四年辛亥一月一日）	兵庫塚本通五の二三川柳現代社、有馬風柳寺氏主宰、關西鐵軌新聞附錄として發行、三號以下不明、未發行？
第一號	（明治四十五年壬子六月一日）	東京、集鴨二の三五新影社、大正三年四月一日（第三卷四號十三册目）分で終る、第三卷より深川常盤町大藤治郎方編輯所
徽第一號	（同　六月廿五日）	松山市南堀端町卅三紫文藏會發行、四六倍八頁、休刊期不明
紫太陽の虫第一號	（大正四年乙卯十一月一日）	東京短詩社（乙卯三月創立）發行、大藤治郎、中溝新一等主宰大正五年三月廿五日第六號を出し休刊
十句集第二輯	（大正二年癸丑一月四日）	名古屋、熱田富江町中京川柳社、合判六〇頁、大曾根大吉名義
溪雅久句集全一册	（同　五月）	伊豫柳壇に名ある喜多郡河邊村水本溪雅久君の句集
草笛第二號	（大正四年乙卯五月二十日）	伊豫温泉郡垣生村草笛社發行、四六横廿四頁、四號で休刊
かささぎ初編	（大正五年丙辰四月五日）	岡山川柳社、河野鐵羅漢編輯、四號、（弘美追悼號）で終刊

以上九件は最近の探査にかゝる收獲、とくに追加記入（「徽」は發行年訂正）

華	第一輯（大正五年丙辰八月十日）	滋賀縣滋賀郡小松、村華の社、四六判十頁、廢刊期不明、大正七年三卷二號まで發見す
あかざ	第一集（同十月一日）	東京、淺草赤町あかざ句集發行所、編輯人苦笑子、和紙横細長八頁紫會の機關紙、大正六年五月八日第六集を出し終
川柳と小唄	全一冊（同十月十七日）	東京、淺草國華堂、國華倶樂部編、小林紫軒が明治三十九年に川柳名句集、同四十三年に滑稽文學川柳名句集として出せし物
おもだか	第一集（同十一月二日）	山口縣山口町石原小路柳川洲馬方山口川柳社四六横三十六頁大正十年三月十五日十一集を出して廢刊、洲馬幸麿孔雀の共力
柳櫻	第一號（同十二月一日）	福島縣石城郡平町八幡小路三九柳櫻會、吉成劍突坊主宰、謄寫版、半紙半枚二折五葉、大正十五年六月第十卷六號を出し休刊
ほうてん	第一號（同十二月十五日）	奉天驛前遼東新報社分局内奉天編輯所、發行人柳香田邊米三郎四六判、四頁、廢刊期不明（九年七月の十五號まで發見）
波知寸、之音	全一冊（同十二月）	故齋藤正次遺稿、井上幸一編輯、大判唐紙贅澤刷限定出版本
黄白	第一號（大正六年丁巳一月一日）	東京、赤坂傳馬町黄白社、五味茶童個人誌、菊三八頁、大正十年一月三日の十七號で休刊、前の「黄白」とは別種
ホーネン	第一號（同一月廿五日）	福島縣白河町大谷五花村方白河吟社（後の白河川柳能因會）七號にて廢刊
獨活	第一（同一月十二日）	岡山市西中山下柳川筋一三六龜山寶年坊發行、美濃四半分一の二つ折二葉、氏の句廿三を記す
唄	第二號（同一月廿五日）	東京、下谷區池の端七軒町一、小田島方唄戀社、厚紙四六判四頁
川柳天の聲	その二（同一月）	大正五歳丙辰之整一年雜誌「日本及日本人」所載川柳今併成一綴其他その一と同じ
花こよみ	第一號（同一月）	東京、下谷區入谷町鼓會、和紙四六判十頁、十一月の第六號で休刊

局待川柳全國大會名句番附編成各選者採點明細表（同一月）　やよひ會發行

空	第一號	（大正六年丁巳二月五日）
ツ	風	群馬縣伊勢崎新町三山社、毛筆版半紙七枚、休刊期未詳
アサダ文庫	第一號？	（同二月二十三日）東京、淺草區馬道七アサダ藥局發行、四六判十六頁、淺田きん笑、伊澤久坊等贈答
川柳ひとは	二卷二編	（同二月二十五日）東京、日本橋區小傳馬町一葉會、四六判十頁、毎月それまで葉書一枚の柳誌を出す會名の起る所以、十一月號で休刊都鳥吟社と合併、みやこ吟社起る
川柳名句番附	一枚刷	（同　三月五日）川柳やよひ會發行
局待川柳	全一册	（同　三月十日）東京、芝川柳やよひ會發行、菊半横五十六頁
新寶暦	第一號	（同三月十三日）甲府、代官町山梨川柳會、四六横三〇頁、大正七年一月十五日の第九號で休刊
舟月會報	第一號	（同三月二十日）岡山市内山下、水の手倶樂部、四六竪半横十頁、三號より青瞳となる
わがまま	第一號	（同四月二日）札幌區南二條西五丁目尾山紫被布發行、四六判厚紙四頁、十一月の五號より「十一洲」と改題、大正七年一月七號にて休止
第十八回川柳七人會吟	四月分	（同四　月）半紙横半截二葉、謄寫版、富士子、逸見仙、好風、白牡丹、蘭華、夢考、春花の出句研究誌、劍花坊飴ン坊二氏選
青瞳	第三號	（同五月一日）前揭、舟月會報の改題、型其他舟月會報と同じ、休刊期不明
アツシ	第一號	（同五月五日）札幌區南五條西五丁目一、アツシ會、四六判二つ折四頁厚紙、大正七年十月「鏑矢」と改題、仔熊、熊の膸、オホツク、アツシ鏑矢と次第に變改
青龍刀	第一號	（同五月二十五日）金澤市象眼町五三青龍刀社、四六判八頁、十一月十五日第四號を出し廢刊
句都かご	第一號	（同　六　月）金澤市竪町一〇四、ザックバラン社、四六判八頁、河合美濃守編輯四號で休刊？
京都文藝	第一號	（同　七月一日）京都市小川一條上る京都文藝社、四六判三二頁、大正十一年三月五日（第六卷第三號）を出して廢刊、「串團子」の前身
アツシ	第一號	（同五月五日）静岡縣藤枝町本町藤枝やんちや會發行、四六判三八頁、五號で休刊
蓉	第一號	（同　七月十五日）
芙		

翡翠	二の一	（同 七月十五日）	東京京橋區采女町十一平瀬蔦雄方翡翠社、大正三年九月一日創刊し八號で休刊したヒスイの第二次の出刊枡型終刊不明
柳の華	第一號	（同 七月十五日）	札幌市北夢之助發行、四六判、大正七年四月十五日の「筒井筒」第四輯に合同、從て三號限り續刊、五號目は「萍」となる
繪日傘	第一號	（同 八月十五日）	大阪島の内綿屋町繪日傘川柳會、溪花坊創作句集、二枚折、五號より舊大大阪型となり公開、大正八年十月一日第三卷第五號を出し休刊す
ひる顏	一號限	（同八月二十六日）	兵庫縣東須磨下今池前田青岸方神戸川柳乙鳥會、四六倍判四頁青岸一山二山秋晴みの作半原坊艷笑紋太の句と書顏忌句稿
住吉神社奉燈川柳	全一冂	（同 九 月）	福島縣石城郡内鄉村高坂鎭座村社住吉明神例祭奉燈川柳句集、贈寫版、半紙半分二つ折七葉、劍突坊、の序文有發行所不記
やはた吟社滿一週年募集吟句集	一枚刷	（同 十月一日）	南海時報六十七號附錄、菊倍判、劍花坊、劍珍坊、鐵羅漢の選
柳太刀壺		（同 十月一日）	兵庫縣西須磨下今池前田青岸方神戸川柳ツバメ會、四六倍判四頁、此柳太刀は翌七年四月第七號を以て休憩、五月より四六判にして改めて第一號を名乘るツマリ一號が二つある譯
明治大正新川柳六千句	全一冂	（同 十月一日）	東京、牛込神樂坂上南北社發行、三六判變形、二六二頁、井上劍花坊撰、咳一つの句を添ふ
紅籠	第一號	（同 十月十日）	京都市祇園町北側三四七、京都祇園文粹會、四六判四頁
へソ	其の一	（同 十月十三日）	京都市小川元誓願寺下る四、京都ニコニコ社、村岸清太郎發行菊判竪二ツ切り四頁
やなぎ樽評釋	全一冂	（同十月二十四日）	東京、下谷區池の端茅町二の十四、南人社發行、菊半三七四頁沼波瓊音著
新川柳劍花坊句集	全一冂	（同十月三十一日）	福島縣石城郡平町八幡小路柳櫻會、吉成劍突坊編、菊半一八六頁、大正時代の第二句目が咳一つの句
十一洲（わがまま改題）	第五號	（同 十一月一日）	贍振國追分町河内岐一方十一洲社、四六判十二頁、號數はわがままのを繼ぐ、大正七年一月七號を出して休止
川柳鬼怒柳	第一編	（同十一月十八日）	伊東夜叉郎作句集、四六判八頁
篳篥	第一號	（同十一月廿八日）	東京、芝愛宕町二の六杉淵内川柳吾嬬吟社、菊倍四頁、休刊期不明

月評 街の高臺

路郎・艸樂
汀柳・春秋

前號近作柳樽より

戀人の腹におさまる ソーダ水　大門

春秋　この句「おさまる」とは巧いものです。

艸樂　何でおさまるが巧いか感じられた點をもう少し具體的に說明して欲しいと思ひます。

春秋　何故にいゝかと云われると一寸說明至難いが、只巧いと感じたのです。

汀柳　戀人の飮んでゐるソーダ水を、見詰めてゐるとストローから吸ひ上げられて、戀人の腹におさまつてゆく樣にも見えた、その「おさまるソーダ水」でこの句が生きてゐる樣に思はれるが、春秋氏の云われた樣な感銘は受けない。戀人を詠んだ句として上々のもので無からう。

春秋　私は「おさまる」と表現された主觀の深さと云ひますか、それに感歎するのであります。

艸樂　詰りこの句は戀人と對坐して、ソーダ水を飮んでゐる喜びを詠歎に近い氣持で詠んだ句で其處に春秋氏の「おさまる」の巧さを感じられたやうに思われるが、私はこの句をそれ以上に高價に買ひ兼ねるのである。

路郎　一讀して面白い句、巧い句、と云ふ事は云ひ得るが熟と味わつてゐると、既に定評のある大門君の句としては上の部ではない戀人とソーダ水、戀人とカルピス、と云ふやうな對照は新しい見付けではないが、作者の腕に依つて、是丈けのものに纏め得た手柄を賞讃するに過ぎない。

お德用マツチ三本目は折れず　牧人

艸樂　お德用とか實用向とか云ふものが、往々にして粗惡品の代名詞である場合が多いそれ程に我々の生活に於て感ずる事が多い爲にそう云つた事を句にする場合に概念に陷り易い所「三本目は折れず」と云つた現し方が力強く響く。

路郎　この作者は「お德用マッチ」の句と云ひ「母が持つバリカン既に侮られ」の句と云ひ所謂川柳らしい川柳の骨をよく呑み込んでゐるが私は寧ろ「候文過去の女へ用が出來」の句を推奬したい、お德用マッチの句の異色ある點は確かに「三本目は折れず」であらう。

春秋　この句の表現に就いて私が作者ならばお德用マッチの「お」を省いて「德用マッチの」と「の」の字を入れます、又先生の云われた通り私も「候文過去の女へ」の句が良いと思ひます候文と上五に置いて過去の女への改たまつた氣分を顯した所が良いと思ひます。

路郎　今春秋君の云つたお德用の「お」の字を省いて「德用マッチ」のとする點には反對したい矢張り原句の「お德用マッチ」でぶつきれになつたところに「三本目は折れず」の强さが却つてガッチリと上と下との關を結びつけてゐると思ふ。

艸樂　その上お德用マッチと勿體振つたところ作者の意が働いてゐる樣に思れてゐる。

着飾つて夫の愚痴を云ひ歩き　素月

路郎　兎に角妻君の柄と云ふものが非常にハッキリ出てゐる調子から云へば、古句のやうなところがあるが矢張り現代のある種の奥さんの一面を充分に表現してゐる。

春秋　この句の夫は次の二句から察しても勿論亡夫の事でしやうな、こう云ふ場合に次の二句がなくこの一句としてこの夫を亡夫と受取れる場合と受けられない場合とがないでしやうか。

路郎　それは一寸可笑しい云ひ方だ、この句を讀んで亡夫と解釋しては間違つてゐる警へ次の二句「燒香の終り段々押して來る」「三回忌妾のあつた事が知れ」と云ふ樣な句が並んでゐようとも事實その亡夫と關連があらうともこの句の場合は生きてゐる夫の句である。

汀柳　私も勿論亡夫とは思ひません、若しこれが亡夫であればこの句を頂く氣持にもなりません、若し亡夫だつたら亡夫と云ふ文字を使われた事だらうと思ひます。この句は長屋の女房が近所へ夫の愚痴を云ひ歩くと云つたありきたりのものを一階級上へ持つて來て所謂中產階級とでも云はうかそう云つた奥さんに當て嵌めて巧く云ひ表してゐると思ふ。

路郎　亡夫であれば汀柳君の云ふ亡夫と書いて夫と訓ます方法もあるのでそうするだらうし第一死んだ夫でない證據は上五の「着飾つて」がよく現してゐるこの句の內容を引き立たせてゐるのも實にこの「着飾つて」である。

春秋　成程、訊けば死んだ夫の句でない事が判りますが、私は「着飾つて」が夫が死んだのに對してその妻君が「着飾つて」死んだ夫の愚痴を云ひ歩いてゐる句だとばかり思つてゐたものですから。

艸樂　確かに調子は多分に古句の匂ひを持つてゐるが現代の有閑マダム等に當嵌ていゝ句です。

春秋　詰り句の表現以外の想像する事に依つて私の間違つたやうな結果が生じるものと思ひます。

路郎　今夜は是位にして置きませう、大變暑いのに御苦勞でした。（八月二十六日夜、於事務所階上、與三郎筆記）

すひかづら考

西田艸樂

武玉川研究は、梅本秋の屋、森東魚、蛭子省二の三權威者によつて、毎號貴重なる研究が發表されて行く事は、獨我社の光榮とするのみでなく、此の研究が現在各方面に大きな期待をかけられて居り、後世斯道研究への大なる貢獻でもあり、三大家に對し滿腔の感謝と敬意を惜まぬものである。

八月號「二篇研究」の中、「すいかづら」の句の御解說は、植物學の專門に觸れるものであつて、いさゝか專門的の立場から補佐申上げて見たく、淺學甚だ恐縮に堪えざるも、かうした事は如何に博學の人と雖も、そう萬事に通じ難きは止むを得ざる事で、西原柳雨翁の著書などにも時として、多少の誤謬も散見する處で、秋の屋さんも「猶調べたいと思ふ」と疑問を殘して居られる事であるから、そのお言葉に對して多少とも御參考になれば筆者の光榮之れに過ぐるものがない。

(470) 日陰〳〵とすいかつら　賣

此のすいかつらは忍冬と混同せずに置きたいのである。先づ忍冬の事を申上げると、植物學上、すひかつら「い」にあらず。(忍冬) Lonicera Japonica 獨逸の植物學者アダム・ロニセラの名譽表として附せられた學名である。忍冬科の植物山地路傍等に自生する蔓性の小灌木、楕圓形の對生葉を有し、全緣尖鋭である。初夏葉腋に「おしろい花」の樣に長き花筒を有する。白色合辨花をつける。「うつぎ」の類が同科であるから、花の形が相似てゐる。此の花始め白く、日數を經るに從つて黃色に變ずる。ために金銀花など呼ばれる。甘い蜜腺を有する。子供等が採つて吸ふ處から、すひかづらと呼ばれる所謂であるらしい。忍冬をよくしのぐ木であるから、漢名忍冬と稱する理由でもある。

さて此の木は、第一藥草の一つでその効能を一々擧げると甚だ面到であるが、概して利尿の効がある處から、瘡毒、淋毒、胃腸の藥と並べると、民間各地方で樣々に說かれるがこゝではその煩鎖を避けるが、秋の屋さんの「夏の飮料にするものと考へてゐた」のお言葉であるが、前揭の句から押せば夏の飮料の言葉は當を得た如くであるが、夏のみなく、忍冬は古來忍冬茶として茶の代用品に當てられてゐる帳は著名な事で、現に奈良縣吉野郡あたりでは私は旅行中專ら此の茶を飮まされたのである。番茶に似て野趣のある臭味を有す

る。

茶の代用品としては、カフエインを含まず興奮性に缺くるが、古來忍冬、茶五加、茶甘茶、摘草茶、拘杞茶などがあり、既に明治三十年頃に東京農科大學で分析された、成分表さへ出來てゐる。

そういふ譯で此のすひかつらは、飲料、つまり茶の代用として賣り歩いたかも知れぬが蛭子さんの大百科辭典から引かれた、水加都良、水鬘、美髪水の一種云々の物とは全然異るもので、これは寧ろ五味子に當るものである。秋の屋さんが和漢三才圖繪から押して、「昔の人はさねかつらを誤つてすひかつら(忍冬)と呼び、中略忍冬は水に浸しても粘汁は採れまいと思ふ。といはれてゐるのは、それに違ひありません、忍冬からは絶對に粘液は出ない事を保證します。但し、すいかつらは昔の人が誤つたのか、いつそ別箇に美男鬘につけた名稱かは斷じ難くもある。「い」と「ひ」の字の違ひなどもあり私は最初此の兩者を混同したくないと申した次第です。

ではびなんかつらの方を少し覗いて見やう

さねかづら――南五味子、(大百辭典に兩五味子とあるは誤ちならん) びなんかつら――とろゝかづら――どろはかつら――あんたかじや Kadsura Japonica 種々の名前がある山野に自生すれども觀賞用として栽培もされる。常綠蔓性の草木葉は厚く平滑にして光澤を有し、楕圓形尖鋭、七八月淡黃白色の五瓣花を開き、秋小球の集合よりなる紅熟直徑一寸位の果實を結ぶ。木蘭科の植物である。

これこそ坊間販賣するびなんかづらであつて、恐らく水鬘、水加都良等に附合するものである。現に私も藥局經營の頃はよく賣つたものである。「俚言集覽」にある如く、今でも二三寸に切つて、束ねて市販に供してゐる、此のものは、水に浸して置くと粘液が出て、十分髪油の代用になるし、現今では多く癖毛直しとして使はれる、ちゞれた髪に此の汁をつけて置くと、乾燥した後もその粘着性によつて、髪がちゞれないのである。前掲とろゝかつらの名稱もそこから來てゐて、粘着性を利用して製紙家が「とろゝあふひ」などと同様に使用して來たものである。之れを「すいかつら」と稱して來たのは忍冬の「すひかづら」と混同したのではなく、別箇に附した名稱の様に思へるのであるが、どうか?

次に忍冬酒の事を少し述べて見やう。

(483)　看病へ突出してやる忍冬酒

前述すひかづらの句と共に、句の解説については適當に御三方に一任して置くべきで、私は句材に取扱はれてゐる物品の説明をする外に深く立入る資格はない。忍冬酒については蛭子さんが書いて居られる事は私も參考になつて嬉しく思ふ。尙ほすいかつらの句の所で秋の屋さんが和漢三才圖繪から、忍冬酒の事を引いて居られる、三方圖繪には忍冬酒の製法も載つてゐるから讀者はついて御覽になるがよからうが、忍冬酒の製法は種々の方法があるらしい。アマチユアの著述家であるが梅村甚太郎氏の「民間藥用植物誌」に次の様に載つてゐる。

「製方古來一ならず。今其一を記すれば糯米をつき、水にて洗ひ炊甑に盛りて蒸し、度を計りて陰乾せる忍冬花を加へ、蒸して莚は移し、冷して他の桶に入れ、麴と火酒とを加へて混和し、密封しおけば七週間にして全く熟す。其間每週櫂を以て攪拌し、之を出して布袋に入れ搾槽に盛り堅木を以て壓搾すれば其槽覓より流出せるもの即忍冬酒なり、これを他の桶に藏し五六十日を經て渣滓を去り二年を經て製了す。」とある。

忍冬酒は諸風痛痺濕腫及び癰瘍の類を治し或は胸を寛め、中を温め欝を拂ふの効あり、と。

かういつた酒の製法は大體混成酒と見るべきで、和漢三才圖繪の煮汁釀酒とあるも、忍冬そのものからは如何なる方法を以つてしても、アルコール醱酵を起して酒になる程のものではなく、此の場合も糯米のアルコール醱酵に忍冬の花の成分の一部が溶存してゐるに過ぎないもので、葡萄酒その他果實酒などとは趣きを異にしたものである事言を俟たない

當世不通漫談（二）

梅本塵山

□　蒟蒻屋の六兵衛
○　田舍寺通樂和尚
△　三途河の奪衣婆

□三途河の婆さんは、冥土へ往く亡者達を途中で抑へ、その着物を剝取るさうだが、去年より今年に懸けて、冥土へ往つた、東西の三名優の着物をも剝取つたかえ。

△それは名優だらうが凡優だらうが、用捨なく引剝いだよ。

○尾上梅幸は、羽二重の水上下を着て往つたさうだね。

△ア、四段目の鹽谷判官その儘の扮裝で白粉を顏に着けてゐた。

□昔は人氣役者が出ぬと、直に死繪といふものを出版して、それは市中に呼賣りしたものだね。

△八代目團十郎が死んだ時には、死繪が七十種とか出版したのが、皆飛ぶやうに賣れたといふ事だ。

○あれは役者の肖像と法名と、死亡の年月日とが記して有つて、其役者の辭世の歌句が書いてあつたが、自作の歌句は甚稀で、多くは他の人が代作したものであつた。

□今度、梅幸が死んだので、珍らしく死繪が出た。その辭世もやはり某氏の代作だが、代作した某氏も、近頃、梅幸の後を追つて冥土へ赴いたよ

△昔者の昔譽めとやらで、昔者は昔の事ばかり譽るやうだけれども、今の役者達は、昔の役者よりも小いね、それも身躰の大小をいふのではなくて、技藝の大小をいふので九代目團十郎などは、小兵の方であつたけれど、それが舞臺に登ると、如何にも大きく覺えたね。先代の中村芝翫といふ役者も、その舞臺顏の立派さは、今の多くの役者にも、看出すことは出來ないね。此の春、冥土へ來た鳴治郎の熊谷直實が、立派だなどといふけれども、芝翫のに比べてみると、亞米利加大陸と布哇島ほどの相違だよ。

○三途河の婆さんも、外國の地理を知つてゐるのは感心だ。

□俺も芝翫の熊谷を觀たが、それは明治十年六月に、新富座の舞臺で、五代目菊五郎の敦盛、中村宗十郎の相摸であつた。

○俺はまた明治卅一年十月と、歌舞伎座で「嫩軍記」を看たが、陣門の場で團十郎の熊谷の豪快なのと、菊五郎の直家の颯爽たる姿とは、今も猶目に殘つてゐる程で、あれに比べると今の俳優は、全く價値が無いね

□今の俳優が小さく觀えるのは、一つは舞臺の廣さに據るのであらう。近頃、何處の劇場でも舞臺が廣く成つたので、立派な大道具を飾る事になつた故、其處へ出る俳優が自然に小さく觀えるのであると思ふ。

△役者は兎も角も、芝居の大道具も小道具類も昔より幾層倍も立派になつて、此ればかりは威張つても宜いよ。

○大道具や小道具ばかりでなく、劇場全體の構造も、昔と今とは、大小雲泥の相違で、昔の芝居は屢々火災に遭ふので、屋根は柿葺で、天井は簀の子、舞臺廻りの羽目板などは、節穴だらけであつたから、夏芝居の奈落覗といふ、惡戲が流行した。

□その奈落覗といふのは、どんな事だと。

○此の話は猥褻に亘るので、こゝで語る事は出來ない。

△江戸時代から明治の初年までは、各座ともに早朝の暗いうちから始めて、夕刻の燈火がつく頃に終つたものだが、當時は瓦斯も電燈も無く、總て蠟燭の明を用ひ俗につらあかりといつて、長い柄を附けた手燭のやうな差出しといふ物で、舞臺や花道の役者の顏ばかり照らした。夫れから見物席の方は、東西兩桟敷の鴨居に、茶屋の名を書いた提灯を吊つたが、其の外には燈火が無いので、平土間などは眞暗であつた。

○東京の劇場で、始めて瓦斯燈を使用したのは、明治十一年八月の、新富座の夜興行で大名題を「舞臺明治卅夜劇」として、一番目が八犬傳、二番目が番町皿屋敷の狂言で五代目菊五郎のお菊の幽霊が出る時に、舞臺の瓦斯燈が、忽に暗くなり忽に明くなるので、觀客一同は吃驚して、大喝采をしたが、劇場の夜興行も此の時が最初だ。

□夫れから劇場の舞臺に出す月も、昔は雲を描いた箱の前面に、圓形の穴を明けて紙を貼り、その中に蠟燭を點したものだが、今のやうな硝子張の月に、薄雲のかゝる仕掛は、明治十二年二月、新富座の二番目狂言「人間萬事金卅中」の、横濱海岸の場を用ひたのが最初で、これは菊五郎の考案だといふ事で、觀客は珍らしかつて、世間の大評判になつた。

○舞臺に出る幽霊が、臍下と襟から顯はれ、また壁などに消える仕掛は、明治十三年十一月の、新富座の二番目狂言「木間星箱根鹿笛」のおさよの幽霊が最初で、昔の幽霊の扮裝は、鼠色の着物の裾を細く長く引いたものであつたが、此の時のおさよの幽霊は、夫に殺害された時の衣裝その儘で出て觀客を驚かした、怪談物の本家と呼ばれたゞけに、五代目菊五郎は、演劇の幽霊の改革者だね。

□それよりも前の、明治十一年十月の、新富座の「二張弓千種重藤」といふ中幕狂言に九代目團十郎が、齋藤實盛の役を勤めた時烏帽子直垂を着て舞臺に出たが、抑これが活歴といふものゝ最初だと思ふね。

○あの活歴といふものは、假名垣魯文が名附親だと聞くが、初めは「活歴史」といつて活きた歴史といふ意だが、後に史の字を除いて、活歴とばかり呼ぶやうに成つた。併し史の字を除いては意が通じない。

□元來あの活歴といふ演劇は、小中村清矩、依田學海、畠山如心齋、柏木探古其の他の學者や有職家達が、團十郎を唆かして遣らせたのであるが、歌舞伎といふものを初めて目に觀た、九州四國出身の高官などに歡迎されたけれども、東京土着の人達は、あれを異端視して不評判であつた。

△九代目もまだ權ちやん時代には、世間から大根と呼ばれたが、明治時代になつてから演く名を揚げたのだよ。

○大器晩成といふ奴だが俳優にも、亦運不運が有るね。

□此の二月に死んだ、中村鷹治郎なども、團菊全盛時代の俳優であつたならば、第二流であつたらうが、大正、昭和の人であつたから、第一流といはれたのだ。

○大阪人の鷹治郎に對する憧憬は實に素晴らしいもので、まるで狂人のやうだね。

四・國・遍・路（其の四）

松山　酒井大樓

三月二十九日　燒山寺參拜　一番から札初をした人々は大抵此の燒山寺で泡を吹くので有るとの事それ程恐れられて居る難所では有るが伊豫讃岐と打つて來た吾等には已に歩き馴れた健脚！有り何程の事有らんと呑んで掛つたのが大間違ひ標高五二〇米と七二〇米と七〇〇米の高山を三つも登つては降り降つて登たりして漸く燒山寺に達するんだから、

燒山寺　彌生の末に　深き雪

で有つたにも拘はらず

雪の山瀧なす　汗を　拭く　山路

で相當鍛へた積りの健脚も

漸くに人後へ　落ちて　降る　山

此の難所の登り道程が三里の餘、これでは足弱の人には無理ならんと有つて大師の御情に依り山中に庵を設けられ休憩所とも成し通夜堂ともなされたのが柳水庵現在では

ホテルかと思ふ柳水庵の宿

が有るんだから、今更大師の偉德を知り得ると共に四國の道中到る處大師の御惠の遍からざる所なりと感激の涙に咽ぶのであつた。

◇

燒山寺下山十三番札所大日寺へ行く迄六里餘の長道中迂與曲折の河畔の路を通る事とて

何と瀧瀧と川との阿波の國

の景に遭遇する其瀧たること大小幾十となく有るのでこれを京阪の地にでも有らしめばとは我一人の嘆聲ではない

山奥の瀧見る人も無く流れ

◇

四月一日　德島入城　二十五萬八千石の城下へ入城した遍路は宿を探すのに一苦勞見物のしたい此の町宿が無く

一概に旅館遍路を汚なが　り

お遍路に旅館お金は無いと極め

此の町へ遍路來るなと云はぬだけ

これは獨德島に限つた事では無いが、遍路と見れば宿泊謝絶と云ふ旅館が大部分で有る而し遍路でも人で有る、時には旅館で休養したい氣の起る場合も有る、遍路宿へ泊れば金二十錢也で濟む遍路が旅館の門をくゞる時んば特種の場合たるや必せり旅館の主人たるものこゝに意を注ぎ謝すべき謝し應ずべきは應じて初めて旅館本來の使命を全ふする所以では有るまいかなど書いてもあの見すぼらしい遍路姿ではネーと云ふかも知れないが

巡禮の身分これはと思ふ方

お遍路の姿をぬけば正何位

こうした方も有る事を言及して置こう。

◇

宿探しに苦心した遍路は

遍路宿　町見物に　離れすぎ

の不便さを忍んで

投宿今や櫻の眞盛り眉山山腹の櫻々々

山腹は　櫻眼下は　寺の屋根

寺町へ　匂ふ酒の　香看の香で

とう〳〵遍路も

遍路笠ぬいで　櫻の春に　醉ひ

◇

四月二日　立江寺參拜　四國八十八ヶ所の內伊豫の橫峰寺讃岐の雲邊寺阿波の立江寺土佐の神峰寺と四つの附所の一つ今迄と伊豫と讃岐の二タ關所は無事通つて來た吾等で有るが一番あらたかなと云はれる立江寺若し此處で御咎でも受けて喰止められては成らないと

立江寺特に畏服をして拜み

警めの御話を聞く立江寺

どうやら無事參拜し終へた時の嬉しさ

ホット息ついて關所の寺を出る

日本名所名物川柳（東京の巻）

前田雀郎選
宮尾しげを畫

（四）吉原

吉原へ行くかとガイド眞面目なり　利尾
吉原で出口を聞いて笑はれる　伶人
餘りにも輕い月給吉原を抜け　梢雨
仲ノ町の朝のまぶしく通り抜け　都會人
吉原で發車時間をたしかめる　木履
團體の女、吉原見て歸り　蘇堂
大門をしみじみと見る朝歸り　輝親
自動車の音に吉原更けきつて　水客

アツパツパ着て吉原は眞晝なり　葉光

臥床錄

山本丹路

病氣らしい病氣をしたのは、これが初めてであつた。第一診で盲腸炎絶對安靜の宣告を受けてしまつた。折柄の酷暑で、新聞紙は、大正何年以來の暑さだとか、一〇〇度にいくら足らぬ等の記事が、夏枯の紙面に巾をとられてゐた。しかし、かうして蟬の聲が晝の靜けさの中に聞こえてくるとこで仰臥してゐると、平生あの事務所の電話のべるが鳴りひゞくさへ神經に應える樣な近代的ないらいらしさをもつ空氣に終日追はれてゐる生活では、反省の暇もなかつた自分とか自己とか、或は人生とか戀愛とか宗教とかいろんな精神的な問題に思ひ馳せることが出來て、たまには病氣になるのもいゝ修養になると、おかしなとこで感謝の氣持が湧いてきたりした。

何しろ仰臥したきりなものだから書物でも重いのは腕が疲れてもてない。で—好きな道の川柳句集や—それも成可く古い作家の作品をいとしみなつかしみ讀んだ。それから近刊の俳句や短歌の雜誌を買つてきて貰つては、いつもとは違つたおちついた氣持ちで夏を繰ることが出來た。

學生時代の或る元旦に、一年間の系統だつた讀書計畫をたてた事があつた。勿論それは他愛ない夢に終つた。かう云ふことは、精神的なおちつきが腹にできる齡までは、なかなかになまやさしい努力でできるものでないと思つた。それから五、六年も經つた今日、相變らず下らない雜誌勉强しかしない自分である。こんなことではたいしたものになれぬしいけないと思ふと、小康の日を無閑に正體のない焦燥にかられたりする。

正直に告白すると、川柳は自分にとつて、最も組し易い文學形式だと思ふ。短歌俳句に比較すると、文學的教養も少くて濟む樣だ。(極く通俗的な意味で)これは川柳が低俗の文學であるためか、高度の藝術性を必要としない故か、または自分一個人の認識不足によるのか、將又自分一個人の川柳的無氣力がさう考へさすのか。とにかくこれからの抽象的疑問符が無意識に一つの腫物の構成して私の胸に宿つてゐる。——

——勿論、私が組し易い文學形式だとか、文學的教養が少くて濟む云々は間違ひでなくてはならないが、これは私一個人の問題だけでないらしい。何等かの意味で進歩的な川柳作家は、かうした或は類似した腫物を抱いて

時にふれ川柳に、乃至は柳壇と云ふ存在に絶望を感じて姿を消してしまつたり、自嘲と共に畏縮して化膿させてしまふ傾向にあつたのだ。

こんな事でクサッテしまふのは甚だ惜しい勿體ない。——

だからこんな感懐が由つて來る病因は、十分突きつめる事が肝心だと思ふ。そして苦しみながらもやつぱり句を作つてゆかないといけない。理論も評論もその重要性は歪めないが、違つた意味で作句實踐に依つて何とか切開いてゆくのが本道だと思ふ。——

とまれ不幸な短詩から幸福な短詩へ、換言すれば不幸な川柳作家から幸福な川柳作家へ、自らを高揚しなくてはならない。そして之はお互の幸福でもあるのだ。

筆が走りすぎた。この問題はあらためて——古い問題であるが不思議に、いつの世にも新らしい生々しさをもつ——考究さるべきであらう。

×

かうした事を考へてゐる時の私はかなり眞面目である。この點に關しては折れ易い熱心さより太い鈍重さを選ぶ。論に走つて虛空に昇天してしまふ愚を習ふなである。

臥床して思ふこと徒らに多く、たゞ愚しき焦燥をのみ感じつゝ擱筆する。（一〇、八、一三）

川柳塔建立

西　いわを

北濱で月電話料二萬圓也を納める株屋が居ると云ふ。商賣だが二萬圓の通話料も流石に株屋らしい豪氣さである。

一口に二萬圓と云へば何んでもないが今此れをABCの三人に與へたとしたら、

Aは信託に預金して晩年の安逸を樂しむだらう。

Bは其の半分を出して何か事業を計畫するだらう。

Dはスッポリ相場に出すとする。

此の二萬圓はこうして使はれ迂餘曲折して行くのに株屋さんではモシ〳〵を一ヶ月續けて貰してしまふと云ふ蓋し勿體ない限りである。

僕に與れるとしたら如何する？川柳塔でも建立して後世に殘すとするか、ある日そんな事を考へた事がある。

川柳のたね　其一

青木史呂

お江戸は八百八橋、浪華は八百八町と相場は決つてゐますが、その大阪の眞中に然も僅々二丁足らずで露次の數がなんと！六十を越える處がある事を皆さんは御存じですか、嘘だと仰有るでせう私だつて最初はそう思つたのですからね。

皆さんがオフイスに喫茶店に、話題が盡きた折茲んなことを知つてゐるのも一つのテですよ。

何故つて、一人で數へて的確に云ひ當てられないのですから、現に斯く云ふ私自身、その都度數字が違つてゐるのだから面白いではありませんか。

こうなると大阪の名所にでもなりそうです私が嘗つて某氏へこの話をした處。

「俺はあそこを通るのが近頃一つの興味になつて來たよ」と云つてゐました。

川柳のたねはこんな所にあるのかも知れません。

盗しかうした町のある事も變つてゐるぢやありませんか。

場所を知りたい方は我川柳雑誌社事務所へお集り下さい、そして南進約二五〇米詳しくは上汐町一丁目二丁目左右に注意、サア皆さん

隊伍堂々　數へたり、數へたり

×

戀人とあるいて露次の數をよみ

（一〇、八、一〇）

僧侶とみかん

辻　いの助

蜜柑の出盛る頃の日の午後、

郊外にもかい空地に人集りがしてゐた。

なかには衣を身につけた一人の僧侶がみかんを手に、何かしきりに說教してゐる。

僧侶の顏？どこやらで見たやうな顏だつた

〃エヘン、みなさん、これこそ弘法大師のこされた眞言秘密の法ですぞ。

いかなる難病と謂へどもたちどころに封じます。

いまこゝにある、おみかん、このおみかんにこの秘法を試みましよう。

よく御覽下さい〃

僧侶は群衆の一人にみかんを持たせ、やがて呪文らしいものを口に唱へ、合掌禮拜、九字を切るやうな恰好をした。

〃ハイ、よろしい、そのおみかんの皮を剝いて下さい〃

群衆の一人は、みかんの皮を剝いた。

あッ不思議！皮をむかれた、みかんは双物でも切つたやうに横に切られてゐる。

周圍の人々呆れたやうな、感心したやうな顏をしてみかんに見入つた。

得意然たる僧侶の顏——

たしかに見覺えのある顏だつた。

そうだ自分にはまざ〳〵とした記憶が蘇つた。

可なり以前盛り場のB街で一本の針と糸に依つてみかんの中身を切る手品をやつてゐた香具師の顏だつた。

群衆を離れた自分はひとり苦笑した。

見覺えの香具師、衣着てるなり

「汗と蛭」の手紙

金井有爲郎

毎日あつつい事だ、田の草掻きはたまらぬエぞ、まるで五右衞門の釜うでみてエだ、お天とう樣は百姓にばつかり無慈悲をしなさるんだからなア痛むし、汗は目へ入つてくらすらア、おめえの句が思ひ出されるぞ。

汗は骨からにじみ農夫等まひる

俺にアよくまアこんなに汗があるなア、と思ふ位なもんだ、蟬の奴アヂー〳〵鳴いてやがる、まるで焦熱地獄から俺達をからかひに來たやうな奴等だ、畜生!!

こうやつて一生懸命こしらへた米が、どれだけ俺の倉へへえると思ふ？　去年の村稅もまだ一期分のこつてゐるだし、信用組合の利息ア一錢も負けちやアくれめえしさ、それにおめえ、こやしの借りがうんとあるんだからな、子供だつて氣の毒なもんさ、今年の盆は下駄一つ買つてもらへめえ。

それだのにおめえ達アいゝこんだ、「汗は骨からにじみ」なんて勝手な川柳をひねくつてゐるんだからなア。

おい金井!!怒つちやいけねえぞ、おめえなんか川柳の一つも作る暇があつたら、田の草掻きの一時間もやつてみろ、大抵目がくらんでひつくりけえらア、俺は詩人なんてエのが嫌いさ、百姓の苦しみも知らねえで、さも知つたか振つたゴタを並べてゐやがるからな、それでもおめえのやうに田舎の川柳家はまだましさ、都會の金持川柳家位鼻持のならねエ代物はねえぞ、「戀人がどうした」の「ネオンが淋しい」の、やれ「白い花がうつくしい」のつて愚にもつかねエ事と言つてゐるし又句評家と云ふ偉エ人がそれにおどしやをかけて「非常によく纏つてゐる」だの「感覺がどうしたから、實感がどうしただ」のつて云つてゐるんだから世話がねえや。

元來俺は齒に絹着せる事が嫌れえだが、おめえ達田舎の川柳家つてえもんが、意久地がねえからいけねんだ、いくら川柳が都會で生れたからつて、都會の連中にでつけえ面らさせて置くつてなア間違ひだ、だからさ、おめえなんかもつと百姓のほんとの生活を味つてみて、百姓川柳でも樹立したらどうだ。

田の草掻きアとつても暑い、少し風が出て來たなと思つて足を止めれやア、ヒーロの奴が吸付いて血を飲んでゐやがる、資本主義の走狗みてえなこの蚊が、憎らしいぢやねえかおめえなんかヒーロの句位しか出來はしめえおい金井、怒つちやいけねえ。(八月四日)

秋風漫語

芋　九羅男

裁縫の知らない女でも、化粧だけは知つてゐる。

×

ほめれば、けなし、けなせば、ほめる事それが人間の心理である。

×

戯談を云はれて腹を立てる人間には安心してよろし。

×

人間は己れより以下の存在物がなければ生きてゆかれない。

×

社交家とは酒の飲み方の上手は人間の稱なり。

×

文化の發達とは大自然への反抗なり

×

偉人とは何ぞや
自己の行はんとすることを行ひ、言はんとすることを言ひ得れば偉人なり。

×

始終他人から馬鹿にされてゐる男が馬鹿にされないやうにと鼻下にひげを生した

×

善良な人間があつた
そしてその善良を金に代へた。

盆踊り

前田義風子

ハイヤサンカサイ
ハーハイヤサンカサイ

產業組合、青年團、婦人界同窓會の手によつて復活した、盆踊りの囃子です。
高張りを眞ん中に三番叟をつるして活動映畫會のあとを踊りぬく、頬冠り姉さん冠り等々、思ひ〳〵の姿して八月十六日の校庭は更けてゆきます。
ハイヤサンカサイハー?と。

月

吉田水車選

月が出て貫一臺詞　始めたり　頓知木
出る肚をきめた女中へ月が冴へ　曉童
ルンペンも一所に見てる橋の月　青兒
名月の影曳いて行くワンタン屋　久米雄
いさかつて出て月のまんまる　蘇堂
月の出も惡くはないと聞かされる　今雨
ころがつたあたりを探す月明り　四塊
行水をあがるに惜しい月が映え　喜由
月の夜を歩きバツトを切らすなり　小樓
どの窓もみんな聞いてるよい月夜　文庫
しなびたる浴衣も同じ月を見る　四五麿
灯を消せば蚊帳の青さへ月が泌む　德三
應對のたしかに月を見て別れ　新水
名月は吾事でなし汗をふき　梵愚
非常線月の蔭から誰何され　禿山
月を見る女冷たい手を任せ　輝親
雨蛙喉がうごいてゐる月夜　豆秋
（佳）
月の輪に母はやつぱり海苔を卷き　木履
あの月の下で夫ははたらけり　美那子
本心は言はず月などほめておき　輝親
手內職夜更けの月を賞めて寢る　勝美
（軸）
いゝ月が出たのをしほに座を外し　水車

川柳書架（五六）

井上劍花坊句集

井上信子編

▲卷頭に岡田三面子氏並びに編者井上信子女史の序がある。次にその目次を掲げよう。

昭和時代—後五百年、花の露、餓鬼道、血の戰、春の富士。

大正時代—誘惑、除夜の鐘、人の慾、申の年、飾り馬、新らしい心。

明治時代—鳥金、一すじの墓。

卷末に令息井上麟二君「父の姿」、門下執筆の「劍花坊先生小傳」「略年譜」等がある。

▼昭和十年八月四日印刷、昭和十年八月八日發行、菊版四〇八頁、定價參圓、編者井上信子、發行所東京市麹町區九段四丁目八番地　叢文閣

時計

西村明珠選

時計を合はせて二人の戀仲春秋　美奈子
待つてゐる五分十分十五分同　新世帶柱時計がいさましい　章泉
約束に今日の時計のまどろしき　置時計貰つた人の年をくり　今雨
家出した娘の部屋中に鳴る指子　時計などなくても野良は正午を知り　蘇堂
目覺しに追ひ立てられて朝を起き　柱時計夫婦喧嘩にかゝはらず　曉堂
世間音　待つ時計待たるゝ時計を咎めたて　文庫
柱時計母の氣苦勞知つてゐる　葉光　時計等無視されてゐる圍碁倶樂部　いわを
腕時計見ると女將は話題替へ　禿山　轉任へ時計ばかりがふえて行き　輝親
腕時計わが生活に夢はなし　德三　五分だけ進ませてゐる母のくせ　清一
靜けさへ時計のねぢのもどる音　芳泉　梯子酒あんじる妻へ二時が打ち　美代路
腕時計とまつたまゝで病んでゐる　凡愚　時計屋の時間やうやく探し當て　四塊
誘惑の手前で時計高く鳴り　青兒　捲ききつたねぢが不安な腕時計　都會人
久振り故郷の時計の音とねる　水客　棚元に置き忘れてる腕時計　龜坊
もう歸宅ますと時計へ振り返ゝり　木履　百圓の時計も同じ時を指し　井の蛙
いぢらしさ眞夏の屋根の大時計　久米雄　（軸）
告知板と時計互ひに見比べる　小樓　責任をはたし時計は忘れはて　明珠
勤める身時計にせかれ雨へ出る　佳雄

▼著者は故井上劍花坊の夫人である。本句集は人も知る如く、明治、大正、昭和の柳壇に一大飛躍した劍花坊の句集であるから川柳の愛好者は一讀する必要があらう。

川柳

昭和九年特選集

和田天民子撰

▼天民子氏の「緒言」から

一、此の集は、昭和九年に於て撰者の眼に觸れた、全國の柳誌柳書の句から特選したもので、昭和八年より前の句を集めた「現代川柳名句選」「昭和八年の句を集めた「非常時の川柳昭和八年特選集」の後を繼ぎ、之と同樣の趣旨で撰んだのである。今後事情の許す限り年々續刊するものである。（以下略）

▼昭和十年七月三日印刷、昭和十年七月七日發行、四六版和裝袋綴、定價壹圓、發行者中村順太郎、發行所東京市牛込區拂方町一四　川柳倶樂部社。

川柳二十日會にはどなたでも出席出來ます、毎月二十日の午後から夜にかけて不朽洞一南海線玉出驛西三丁キング喫茶店Iで路郎主幹を中心に語る會です、會費の定めはありません。

▲二十日會の名物男史呂さんの姿を胸に浮べながら七時過ぎにキングへ行くと、常連の禿山君が一人ボツクスでビールを扱かんとしてゐる所だつた。先生も御歸宅夕餉をとられてゐる。史呂さんも艸樂さんも機見女さんも未だお顏が見へぬ。禿山兄へ電話がかゝる「誰や、智惠子か、一人でよう來るか、ハアすぐお出で」と一人娘智惠チヤン（十才）が來るといふので一ぺンに陽氣になる。ところへ久し振の豆秋さん、初めての天國君の登場、先生を圍んで一萬圓事件後日物語や、禿山君の住吉節の實演で智惠チヤンに叱られたり等々で盛り返した暑氣をブツ飛ばしてしまつた（世間音）

▲〃コーシエン〃へ〃コーシエン〃へ、これは明日優勝試合をやるあの〃甲子園〃とは違ふんです。先生の休息所であり書齋であるいとも閑靜な〃孔子園〃です。キングで少し醉ふてワイシヤツが少し後ろから覗いてゐる先生を先頭に、膝の短かい禿山君、腰ぎんちやくの智惠子さん、新進の天國、世間音の兩君、ノータイの豆秋といつた連中がゾロ〳〵と宵の街を〃孔子園〃のお旅所へとくり出したんです。玉出座の前で娘さんがちよつと振り返つて見てゐました。△先生のお風呂の速いこと私は疊の上に寢そべつて阪大句集「大川端」を開いて、その目次は未だ讀み終らない——時間にすれば三分間位？——間にもうまつ裸體でお風呂から出て來られた。禿山君曰く「先生烏の行水だんなア」。△先生がお湯から上られた頃、夢裡さんと、いわをさんとが見へて、座はだん〳〵賑やかになつて來た。先生を中心に松茸狩のはなしに花が咲く、孝子山にしよか、能勢はどうだろ、カシワと酒は山で買ふとしても、醬油だけは是非、提げて行こうではないかと誰やらが言ふと智惠子さんが傍から「お砂糖どないしまねんん」なんて、もう明日にでも松茸狩に行くやうな話（豆秋）

▲裸體の主幹に出迎へられて、くつろいだ部屋で座談する。豆禿氏と禿山氏の〇〇が光つてまばゆい。此所へ里十九氏が來ればこれで三光となるわけ、これは失禮かしれんが信用があるんですよ。世間音氏の雅號の由來を天國へ行つた積りで聞いてゐた二人（いわを、夢裡）

▲天理教、大本教……と宗教縱談であたり散らしてゐる世間音君へ「君の雅號も矢張り宗教から來てゐるんですか」と尋ねて見ると「妙法蓮華經、觀世音菩薩普門品第二十五の末文、妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音から來てゐる、賢愚一如、迷悟不二、凡聖同居の境地は即川柳、川柳即佛教の見地より選んだ號です」と、雅號の由來穴賢△光耀會の方は機見女さんは會社の用事で出られないといふ電話があつたし、子供服を着た智惠子さんたゞ一人つきりでしたが、〳〵この光耀會の卵は、なか〳〵熱心で孔子園へもついて來られて、お父さん禿山君のあの膝を枕にスヤ〳〵寢入つてしまふところまで頑張つて呉れました。（豆秋）

柳風スポーツ

森東魚

傳令が投手へ飛ぶと打手へ飛び
キヤツチヤーの元氣ネツトもあらばこそ
デツトボール一壘型の如く詫び
牽制にショートやつばし砂を蹴り
球審はそば杖と云ふ球を喰ひ
さあさお替りと三振野次られる
尻餅をつく三振でケリがつき
負けチーム見れば補缺も泣いて居り

長男豊中一年生補缺として大阪豫選に參加第二戰に慘敗

柳界展望

全國川柳界のこと、各地川柳家の一擧一投足をこの展望欄ですぐわかる樣にしたい。皆樣の御通信を歡迎する。

【大阪】▲麻生路郎主幹は八月七日播州坂越へ社用で出張、十五日近江八幡に行かれ川上日車氏を訪問された。▲山本雨迷君(本社總務)は「川柳湯の村」八月號へ「句は自ら行く」を執筆された▲增位汀柳君(本社編輯長)は八月二十七日東上、福田山雨樓氏と社務打合をなし三十日夜歸阪さる。▲西田艸樂君(本社同人)は婦女世界八月號に「江戸紫の染草と勿忘草」を執筆された。尙九月八日の本社今治支部二週年記念川柳會へ出張と決定された。▲山本丹路君(本社同人)は八月一日より盲腸炎にて病臥されてゐたが經過良好この程全快された。▲橋本綠雨君(本社同人)は八月九日飛彈高山キヤムプ村、十日平湯溫泉に滯在十二日は美奈子夫人も元氣で雨中の安房峠を越し上高地に至り松本へ下つて石曾根郎君を訪問さる。▲關本雅圃君(本社同人)は八月十日頃より病臥されてゐます、切に全快を祈る。▲平井與三郎君(本社同人)長女嘉子さん八月一日誕生御喜び申します▲西村山月君(本社同人)は八月十七日から富士五湖巡りから鎌倉方面へ旅行された。▲竹內機見女さん(光耀會幹事)は八月二日鄉里高知へ歸られ春水君と共に土佐へ寫生旅行中の堂本先生に師事された京都繪畵專門學校出身の奧田定俊氏と會はれた。龍門洞にして「洞窟の中八月を忘れてゐ」春水「吐く息のしろさこゝから身をきよめ」機見女▲妹尾夔人君(本社同人)六女ユキ子さん八月二十三日永眠さる謹んで哀悼す。▲大阪夕刊新聞に大夕柳壇が創設され八月七日より川柳雜誌社同人選として每日連載される事となつた。▲本社玉造支部の白柳子、友帆、雀踊子の三君は八月十八日淡路岩屋へ「播磨灘漁船待機の姿勢なり」白柳子「綿の樣な海へ玩具のような島」友帆。▲放送「川柳の夕」は九月二十二日午後七時三十分より講演「川柳翁に就いて」阪井久良伎、麻生路郎の兩氏、八時十分より「募集吟選評「秋雜吟」阪井久良伎、岸本水府、岡田三面子、前田雀郎、岡本映絲の諸氏で募集吟締切は九月五日。▲雜誌「大阪」誌上に大阪川柳界異聞番傘お家騷動記及び塚越正光氏のへげたれ放談が載せられてゐる。▲本田溪花坊氏はBKより八月三十一日午後六時二五分趣味講演「俗說地藏尊と地方の情趣」を放送された。▲番傘川柳社では九月九日より十四日迄、大阪三越に於て開催「川柳お國自慢」として地方自慢の鄉土色豊かなものと、それに緣のある川柳を出すと。▲長坂一沫君は大阪慈惠病院に入院中の處、七月三日遂に逝去された謹んで哀悼す。▲北島美代路君は八月二十三日橋立へ「橋立で昔の旦那と逢ふ老妓」

【東京】▲川上三太郎氏(本社客員)は八月十日大谷五花村氏と共に仙臺のJOHKから川柳放送をされ十二日に白河能因會に

寄られた。▲大谷五花村氏（本社客員）は今般東京市豊島區西巣鴨町四丁目一九一へ移住される事になつた。▲福田山雨樓君（本社同人）は川柳研究八月號に「川柳はわが宗教」を執筆された▲西島〇丸氏（本誌明治以後の川柳表執筆者）の編輯になる「ほゝづき」二の二が發行され、「〇丸帳」を載せられてゐる、「ほゝづき」は本文五十八頁で一頁一錢五厘、金八十七錢にしたと云ふ、毎號誌代も變る面白い趣味誌である。▲井上劍花坊句集は井上信子さん編廣川松五郎氏裝幀で東京叢文閣より發行された、定價三圓、四六判四二〇頁取次所は東京市中林區大和町二八二柳樽寺川柳會尙同句集出版記念會は八月十日東京八重洲ホテルで催された。▲故藤田珍茶坊の句から二百句を拾つて盟友高須啞三味君の手で編まれた「追憶珍茶坊句抄」が八月十日に發行された、尙同氏追悼句會は十一日に催された。▲河柳雨吉君作詞になる河童音頭は川上三太郎氏の肝入りで川柳研究社八月例會席上に於て發表河童祭をも行はれた、尙住所を東京市淺草區藏前三ノ一七へ轉居さる。▲富士野鞍馬氏は七月末より北海道各地へ巡遊された、「涼しさの釧路は霧笛に明け暮れる」▲宮尾しげを氏（本誌名所川柳執筆の漫畵家）は「ほゝづき」二の二に「川柳奥の細道その四」「色里名所獨案內」文樂人形小道具調べ（五）」を執筆されてゐる。尙今般電話開通大塚六六一七番。▲村田周魚、八十島杜若の兩君（川柳きやり吟社）は青森、函館方面へ川柳行脚をされた。

【神奈川】▲横濱知古川柳會では九月一日午後三時阪井久良伎先生來濱歡迎句會を萬盛にて催さる。

【靜岡】▲東京の川柳おもひで吟社の雨吉、市六、一吉、玉吉、九史、磯の人、駒人の諸君は八月十日靜岡へ吟行、靜岡川柳會の歡迎句會に臨まる。

【長野】▲石曾根民郎君（本社同人）甥にあたる童謠の歌手山崎一郎さんはポリドールに「ハルピンの馬車屋さん」を吹込み天才的童謠歌手として好評を博されたが今般又々「ジヤングルジム」を吹込まれた。▲松本市內の商店街に於て中元賣出しに川柳漫畵の行燈を吊して景氣を添へ賑つてゐる。▲信州須坂に於て第四回新人聯盟總會を催し川柳座談會は大變な熱であつたと

【兵庫】▲倉滿南北、住田亂耽兩氏は八月二十一日武田尾溫泉へ遊ばれた。▲水谷鮎美君（本社同人）の嚴父幸太郎氏は八月二十二日午後三時半長逝された謹んで哀悼す（享年六十九歲）▲田島破蕨君は兵庫縣武庫郡精道村打出東口一—五矢野方へ轉居さる。

【高知】▲野村稻實君は神戸商大在學中であるが七月末より歸省目下病氣とのこと全快を祈る。▲中澤濁水君（本社同人）は七月末土讃線本山町へ河鹿を聽きに行かれた「さま〴〵に河鹿きいてる貸浴衣」▲高知の濁水、春水、水魚、松翠の四君は八月二十四日土佐神社へ參拜された。

【愛媛】▲松山川柳十日會が創設されたが來る九月二十三日夜五時より松山市南堀端高野山にて松山川柳慰靈祭句會を催される（別項參照）。▲本社今治支部では八月十三日故曉童義兄、心府兄、宵明妹、小樓祖父、慰靈川柳句會を催さる。▲前田五健氏（本社客員）は第二十一回全國中等學校優勝野球大會に優勝の松山商業を祝して「國寶が光り優勝尙光り」を子規せんべい本舖へちま庵の求めに應じて染筆さ

れた。▲原田一風君(今治支部)は四國巡拜の足を大阪に延ばして八月七日本社へ訪問、十日朝高野山へ向け出發、二十七日には高知へ行き濁水、春水、水魚松翠、去來の諸君と逢はれた。▲渡邊曉童君(今治支部)は二女出生され宵明君の命名で路子と名付られた。▲谷心府君(今治支部)の令兄は七月二十六日逝去された、謹んで哀悼す。▲本社今治支部主催で川柳雜誌社支部創立二週年記念川柳大會を九月八日正午より今治市大正通り軍人會館に於て開催、併せて七日八日の兩日廣小路越智ガクブチ店で川柳作品展覽會を催される(別項參照)

【德島】▲姻田夕鐘君(本社同人)は八月末より鄕里德島縣美馬郡穴吹町十河繁太郎方へ歸省さる

【鳥取】▲中島鐵洲君(本社同人)は鳥取鐵工購販利組合專任理事縣鐵工聯合會理事として非常時工業動員參加の光榮を得られた

【島根】▲本社松江支部の「盆の集ひ」は八月十四日山川兒居に於て催され淞南、都之介、祥月、莞路、巷二、幸明、柳人、庄介、笑鬼、山川兒の諸君が出席。▲本社簸川第一第二支部より成る簸川川柳社の「簸川」第二號は八月十日發行された、定價一部五錢島根縣今市町一二八尼方が發行所である。

【山口】▲磯部孔雀君は孔雀川柳個人雜誌「港」を四月に發刊されたが、八月七日その第二號を出した。

【福岡】▲田沼瀧の人君は八月十五日橫濱生命保險株式會社の福岡支店へ轉勤された、自宅は福岡市桝木屋町十五へ。

【福島】▲高橋非常兒君は會津若松市榮町一ノ九九レストランライオン方へ轉居。

【青森】▲御下賜金拜戴記念懸賞川柳募集、題「輝く」村田周魚氏選締切九月十五日、宛名青森縣東津輕郡新城村石江北部保養院內北柳吟社。

【北海道】▲函館潮吟社の村井潮三郎君が川柳評論「機關銃」と稱して第一號八月一日第二號は同二十日ハガキ型印刷が發行された。▲函館川柳社では八月二十三日夕函館市末廣町東部事務所で「川上三太郎氏を圍む夕べ」を催される、尙川上三太郎氏は八月二十二日午後六時二十五分VKより「夏の俳句と夏の川柳」を放送された。

【朝鮮】▲池田可宵君(川柳長跋同人)は九月上旬大阪へ來られるとの。

【關東洲】▲大島濤明氏(本社客員)は八月二十一日北滿有數の大都チ、ハルへ遊ばれた。

【滿洲】▲岩崎柳路君(本社同人)は八月十二日滿洲隨一の築港壺蘆島を見學された。

=通信歡迎=

日本名所名物川柳

投句募集

四國の卷

選者 前田五健氏

(一一) 金比羅 三句

〆切 九月二十日

(一二) 寶戸岬 三句

〆切 十月二十日

東京の卷

選者 前田雀郎氏

(八) 上野 三句

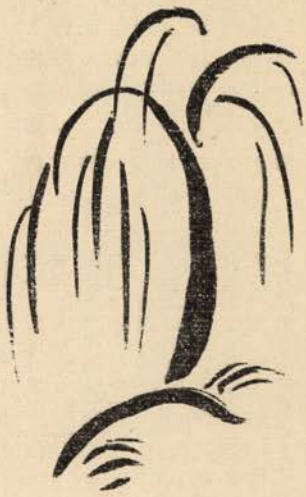
〆切 九月十日

宛先 本社事務所

用紙 ハガキに限る

各地柳壇

いのちある句を創れ



理整・樂艸・柳汀・郎路

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載のこと
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月末日とす
五、投稿先は本社事務所

本社川柳 屋上ビール會

八月十一日夜　本社會館露台

水都大阪での高台、上汐町は靜寂の別天地眼下に觀樂街道頓堀のネオンが點滅をほしいまゝにしてゐる、そして凉風吹くところの露台でビールの滿をひこうと云ふ、何時もの句會とは違つてぐつと砕けた納凉句會。前夜來の強風豪雨にこの屋上での開催は危ぶまれたが、幸にして定刻前にはカラリッと晴れ渡り月さへものぞく絶好の屋上宴となり日頃精進の良い川柳家の鼻はいよ〳〵高く、柳語漫語に花を咲かせて、夜露がしつとりと降りるのも知らず〳〵に、全く打くつろいだ集りに親交を更に深め得た。

出席者

路郎師、かほる、艸樂、鈍魚、雅司、親一路、正光、三巴、牧人、夢裡、汀柳、雨迷、禿山、都會人、豆秋、彩泡、春秋、みつる、美代路、翠夢、夕鐘、與三郎、史呂

兼題　ビール　　路郎選

冷へてないビールを姉の家で飲みかほる
先生の髭へビールの泡白し春秋
大空へ向いてビールの栓が拔け豆秋
生ビール男と生れたかひを知り同
そうや〳〵とビール吹いて呑み同
をんないつたですビールつてにがいのね
解決へ忽ち竝ぶビール瓶彩泡
六つかしい顔へおしぼり生ビール夢裡
一人呑むヂョッキは泡も立たぬなり同
ビールなら呑めると肥滿マダムなり正光
ノンタイと浴衣ビールの滿を引き美代路
ぐちつぽい女ビールのあはみつめ同
團體に宿のビールはまだ冷えず同
（人）ビールビール昔ばなしは後廻し豆秋
（地）相當に飲むと屑屋は知つている親一秋
（天）飲みもせずビール泡を視てゐる妓鈍魚

兼題　浴衣　　路郎選

地味すぎる浴衣を訊けば片身分虹一郎
背浴衣、どれが重役さんかいな豆秋
貸浴衣道頓堀ではぐれかけ夕鐘
基敵が浴衣になつてやつてくる史呂
バナナ屋は袖のちぎれた浴衣を着雅司
遠來の客へ浴衣で妻はわび美代路
あしたのを五合洗つて置くゆかたかほる
絽の浴衣乳房のほどがをそろしく翠夢
（人）ひたすらに浴衣の藍を懐しみ正光
（地）一圓のホテル五十錢の浴衣三巴
（天）功成りて浴衣一反づゝ配り豆秋

川柳雜誌社 阪大川柳會（大阪）丸島利生報

兼題　似顔　　路郎選

大臣の似顔夫人の氣にさわり君女
腹の立つ似顔かゝれた出世振柳秀

プロフヰール似てる〳〵茶を喫みに行き　栞
壁掛の似顔は菊の六代目　淺女
口もとが似てる〳〵と見つめられ塔下
生命が躍動しない顔をかき路生
あの母の顔になるのかあの娘芳一
武子姫に似顔の女さがされる利生
郷關を出て道頓堀の似顔かきたけを
宰相の似顔案山子に仕立てられ青一路
禿頭似顔三本毛をかゝれ柳秀
此の漫畫怒るお前によく似てる同
一平畫く女の顔のすばらしさ路生
目も鼻もなくて次郎の似顔出來淺女
水谷に似て赤玉で稼いでる青一路
旅役者五郎に似たのが一人居り正甫
似顔など書いては淡い戀なりき同
(人)特選の夢衛頭に似顔描く洗塵
(地)瓜二つへうつかり辭儀して仕舞ひ方正
(天)これが己れの似顔とは淋しいな　たけを

傘題　川筋　路郎選

道頓堀こんな水かと宿の朝　柳秀
盛場の裏の川筋蒲團乾し　君女
濱通りひるまをかこつ照り返し　柳秀
立小便川筋の家起きてみる　路生
川筋へ來て方角を見つけ出し　芳一
川筋へ夏の散歩が立ち停り　方正
川向ひよく似た柄の浴衣乾し　君女
(人)川筋の暮し窓からものを投げ　栞
(地)川筋の二階天下の米を買ひ　正甫
(天)川筋の柳租界を二つにし　栞

雜吟　路郎選

一生のお願女手を合せ　路生
魚屋も日の出拜んで走るなり　芳一
ハイキング夜逃げのやうにしよつてる　路生
同窓と言はれて高い卵買い　淺女
地藏祭孫に代つて手を出し　正甫
(秀)トマトからして嫁と氣が合はず　栞

川柳雜誌社 玉造句會（大阪）　清水友帆報

六月十六日　於岸男前製造所樓上

傘題　懸案　友帆選

懸案の道路地主ともめてゐる　白柳子
次回までまた懸案は持ち越され　沒食子
懸案のまゝ本年も梅雨に入り　禿山
懸案はあつさり委員附託なり　彩泡

席題　エプロン　沼食子選

エプロンに豆あり鳩とよく遊び　禿山
エプロンの腕に二世はよく眠り　友帆

席題　泣聲　禿山選

泣聲に母手仕事の手を休め　沒食子
末つ子は母の乳房へ泣きにくる　雀蹄子
アパートで愛の結晶よく泣かし　友帆
靴はいて子の泣聲にまた戻り　白柳子
(軸)泣聲へ兒をすかしてる靴の音　禿山

席題　茶碗　彩泡選

喜びに茶碗の數が足らぬなり　沒食子
淋しげに子寶茶碗買つてゆき　いしを
養生の夏を茶碗の重さかな　白柳子
茶碗濁掴みかゝらん氣勢なり　禿山
子の出來る茶碗も如才なく搦へ　沒食子
子澤山茶碗も皿もかけてゐる　同

席題　夏の散髮　白柳子選

子供皆散髮をして夏祭り　雀蹄子
丸刈になつて故郷へ歸る夏　玉格子
心得て短く苅つた理髮店　沒食子
理髮店涼しい頭にして戻し　雀蹄子
苅り立ての頭で御興かきに出る　友帆
(軸)お祭の頭になつて幕を張り　白柳子

川柳雜誌社 伯耆句會（鳥取）

七月三日　於美笑居　三鴨美笑報

傘題　夕立、鮎　美笑選

濡れるだけ濡れて走つて諦める　蘭鐘
夕立の村を列車で通り抜け　秀峰
鮎取を眺め遍路の日が暮れる　起人
せがむ子に鮎一匹も釣れぬなり　宙二

席題　夏、水遊び　互選

夏の色ぼつ〳〵見せる海水場　美笑
コップからビール溢るゝ眞夏の日　一柳
大山は夏と思へぬ冷へる朝　ひろむ
びつしよりと濡れた着物の水遊び　小判
水遊びおもちやのない子が立つて居る　秀峰
水遊び濡れたまんまの兒が上り　美笑

七月十六日　於美笑居

席題　行水、涼み台　互選

行水を上れば妻の瞳が出來　美笑
行水の子供つぎ〳〵えんにあげ　ひろむ
山宿の更けて冷たい涼台　同
香水の匂ひのして來る涼台　美笑
涼台一人淋しく虫の聲　笑月

川柳雜誌社鐵川支部 高松句會（島根）

七月六日夜　於尼綠之助居

兼題　長話　　綠之助選

待ち呆け連れの話が長過ぎる　笑朗
宗教に凝つた長居を嫌はれる　吐詩夫
長話マッチの軸がないのなり　朴泉
長話看護婦さんに注意され　四十雀
長話つまらぬ愚痴もきかされる　大朗
長話コーヒ空のまんまなり　朴泉

兼題　鍵　　紫光選

宿直へ鍵は重たく渡される　大朗
合鍵がきつちり合ふて手が震び　綠之助

席題　逢曳　　松濤、好郎共選

逢曳の日傘くる〳〵田の青み　吐詩夫
逢曳へ月は靜かに隱れたり　凡愚
逢曳へ人目を避けた森の露　健芳
逢曳の夜露に濡れし袂です　朴泉
逢曳の足へも屆く稻光り　綠之助
逢ふ心待つ心星の白々と　鐵欒

席題　日灼け　　田鶴緒、華村共選

日やけした背へ行水熱いなり　紫光
避暑便り日燈けの程も書いて來る　田鶴緒
日灼けして顏別莊の灯に歸る　綠之助
健康の顏が眞赤な夏休み　朴泉

川柳雜誌社 松江例會（島根）

七月五日夜　於ミドリ喫茶園

兼題　瓦斯タンク　　山川皃選

太陽の眞下瓦斯タンクは光り　錦葉
瓦斯タンク不氣味な夜にしてしまひ　柳人
瓦斯タンク見えて網棚から下ろし　可明
瓦斯タンク此所から先は分讓地　笑鬼
瓦斯タンク圍んで咲いた月見草　柳人

兼題　輪血　　柳人選

友情の最後となつた輪血なり　笑鬼
結局は輪血と決めた善後策　大鳥
母親の輪血へみんな動かない　錦葉

席題　土　　都之介選

梅雨明けの土の匂ひを嬉しがり　柳人
土の香に飢た都會の青い顏　宵路

席題　尻　　砂詩朗選

盜蟲の尻を叩いて立ち上り　正川皃
風鈴の下に晝寢の丸い尻　祥月
牛の尻手綱の端で叩かれる　可明

席題　鶏　　祥月選

餌をあさる鶏は隣の垣を拔け　可明
鶏一羽二羽愛の巢のつゝがなし　巷二
潔白な思想鶏飼ふてゐる　柳人

席題　樂天家　　可明選

樂天家憎らしいまで落付いて　膂須雄
兵兒帶をぐる〳〵卷いて樂天家　砂詩朗
月末を戸じまりしてる樂天家　莞路
結婚のそれから樂天家の惱み　錦葉
樂天家涙にもろい男なり　大鳥

席題　胃散　　莞路選

胃散にも呑み樣がある十八九　糸葉
梅雨明けを待つて胃散に親しまう　柳人
おゝかくて酒と胃散のあけくれぞ　都之助

川柳雜誌社 今治句會（愛媛）曾我部宵明報

七月十日　貯蓄銀行樓上

兼題　燈籠　　在間小樓選

燈籠へ舞妓も醉ふた頬で來る　曉童
燈籠へ兩肌ぬいでビールにし　文庫
月が出て石燈籠が濡れてゐる　宵明
燈籠へ意地ある女むきなほり　藤生
燈籠の若へ刺戟のないくらし　曉童
燈籠へ震魂不滅を信じてる　心府
（軸）水打つて石燈籠に夏が來る　小樓

兼題　蝸牛　　渡邊曉童選

戀人の手に蝸牛うつくしい　藤生
蝸牛の角青空がひらけゆく　宵明
蝸牛の角まで後妻シヤクであり　曉童

兼題　雷　　曾我部宵明選

雷がやみ行水の湯をわかし　心府
雷に男の度胸疑はれ　文庫
村芝居雷一ツみんな聞き　曉童

兼題　時鳥　　谷心府選

時鳥キャンプの飯がこげてゐる　宵明
倫落の女が聞いた時鳥　小樓
山住居身分にすぎた時鳥　文庫
（人）時鳥療養所の窓へ月　宵明
（地）まとまらぬ話へ鳴いた時鳥　曉童
（天）三人が三人聞いた時鳥　同
（軸）時鳥平氏の裔は籠を編み　心府

兼題　簪（カンザシ）　　互選

簪を逆手に持つた丈の事　曉童
簪は前も後も眺められ　同
幌ふかく花かんざしのゆれてゐる　宵明
金屛風簪の影鬢の影　心府
マドロスが花簪を買ふてゐる　小樓

男勝さりの銀の平うち曉童
簪へ奇麗に燃ゆる大文字宵明　笨題　インチキ　互選
インチキのそれから先は云はぬなり曉童
人間の慾へインチキ手を伸ばし心府
インチキであつたに氣付く朝のお茶曉童　席題　黒い健康　互選
八月を海水で暮した胸を見せ小樓
黒い健康今年ビールが二本いけ曉童

川柳雜誌社 **畔柳社句會**（大阪）

七月十一日　於大鐵倶樂部

今般新設の廣島鐵道局へ長らく當社のために御盡力下さいました片岡村夫子、關天八、藤井ひさし、駒居芳松の四氏を送別するの夕

笨題　割引　柳樂選

あつさりと割引く小僧の商賣氣天秋
割引いて聞いても話大きいぞ紫香
切抜いた割引券をそつと出し喜山
（軸）割引はないが特別仕立です柳樂

笨題　町内　柳樂選

町内の事は私と毘が出る紫香
町内の嫌はれ者が晝の風呂呑行
物知りにされ町内に老ぼれる九天
（人）自警團變哲もなく町は明け喜山
（地）町内の集ひみんなに役がつき秀太
（天）町内のみな軒底くうまが合ひ某人
（軸）町内の幹部が見えて又寄附柳樂

笨題　母の癖　柳樂選

漬物を細く切るのも母の癖杏林
亡き父の偉さを今日も母は云ひ呑行
（人）母の癖知つてゝ父は飲んでくる紫香
（地）母の癖位牌を恐いものにさせ木履
（天）母の癖貯金の高を聞きたがり天風子
（軸）母の癖又片言を笑はれる柳樂

宿題　開拓　天八選

開拓はまだ日本刀の要るのなり木履
開拓の船出朝日は眞赤なり九天
（人）こだまするハッパの音へ春芽ぐむ水巡
（地）開拓の鍬へ眞赤な陽のおちて紫香
（天）鍬に手をおいてわが野の朝をみる某人
（軸）開拓へ北滿洲の呼吸を知る天八

宿題　惜しむ　ひさし選

惜別のまなこに雲が流れゆく某人
（人）惜しまれた人に大きな癖があり紫香
（地）負けおしみ歪んだ顔を意識する天秋
（天）何時逢へるかも知れぬ酒すゝめて某人
（軸）トマトまだ青く宿替への惜しみ　ひさし

席題　祝盃　村夫子選

祝盃がすむと主賓は先に引け柳樂
祝盃の今宵みんなの氣が揃ひ呑行
（人）祝盃の泡もうれしいものにされ某人
（地）感激に滲む祝盃高く擧げ久米雄
（天）祝盃へ飛んでくる君僕の數ひさし
（軸）祝盃と別に補欠の聲を賞め村夫子

席題　古疵　史呂選

失戀の寫眞アルバムほけてくる九天
古疵へ觸れゝば弱い男なり呑行
古疵へ母も責任感じてゐ天秋

席題　寢臺車　蘇堂選

寢臺車お前はあそこ俺はこゝ紫香
寢臺車日本刀と長く寢る木履
記者と云ふ名が寢臺車に待たされる天秋
（人）儘かつた昔で搖れてく寢臺車久米雄
（地）肥つてる方が上段寢臺車ひさし
（天）富士山の麓だそうな寢臺車九天
（軸）寢臺車は滿員明日は早慶戰蘇堂

席題　煙突　某人選

煙突へ陸奥は祖國の意氣を吐き秋生
煙突の煙氣になる株を持ち柳樂
煙突のゆがみ風呂屋はためてゐる水容
煙突がもう大阪を朝にする史呂
（人）煙突を折つて浪速の橋を拔け木履
（地）煙突が四角阿部野を恐く拔け史呂
（天）煙突の煙大阪で食ひはづし九天
（軸）煙突の下に英雄主義を捨て某人

席題　夏の夜　披講互選

鈴虫をなかせて無事な夏の夜久米雄
將棋盤助勢が多い夏の夜九天
將棋盤灯りが遠い涼み臺喜山
夏の夜ゆつくり電車待つ氣なり久米雄

川柳雜誌社 **梅田支部句會**（大阪）

七月十六日　於靜波居　松波靜波報

笨題　涼み船　かほる選

持ち寄りのビールとゆれて涼み船紫世
波靜か涼み船から笑ひ聲靜波
（軸）御祝儀とう巻を貰ふ涼み船かほる

笨題　物干　かほる選

物干に水ぎれの菊二つ三つ紫世

二階借物干からの朝となり　靜波
物干の母にあまへて叱られる　觀月
（軸）物干は新ら子供等は皆達者　かほる選
兼題　紙幣束
紙幣束のまへの女將と妓のいのち　鮎美
燈明の油の泌んだ紙幣束よト居　靜波選
紙幣束を入れて金庫の無表情　靜波
紙幣束に眼もくれなくて捨科白　鮎美
席題　番犬
親方の使ひ番犬なでゝみる　觀月
番犬の日向に鎖おもたすぎ　鮎美
（軸）金策に來て番犬に吠へつかれ　靜波
席題　海水浴
だいびんぐ海の景色のなかとなり　鮎美選
海水浴母は足だけ濡らすだけ　靜波
きり〳〵と影が熱砂の濱にまひ　鮎美
ぬれながら出た夕月へ海水着同　觀月
（軸）海水浴海の中から寫してる　鮎美選
席題　色男
色男それが出世の邪間になり　靜波
色男おつぎの部屋で待たされる　遊歩
返盃を上手に投げた色男　觀月
（軸）拳闘をみる氣になつた色男　鮎美　互選
席題　浴衣
朝顏はつぼみ浴衣で水をやり　遊歩
流行の浴衣で舞子すつと立ち　靜波
貸浴衣風呂から戻る廻り道　觀月
家出して浴衣に汗をすはせる夜　鮎美
ベランダの浴衣へビール泡をたて　榮世
旅馴れて車中は寢る氣の浴衣がけ　靜波
席題　川柳連想戲作
馴染から叱られてゐるいゝ機嫌　觀月
いゝ機嫌次の休も云ふて置き　榮世
云ふて置きながらわすれて妓とあそぶ　鮎美
妓とあそぶ會社の帳簿に穴があき　遊歩
穴があき銀行取付くつてゐる　靜波

川柳雜誌社　**御池橋句會**（大阪）

七月十七日　於日本樂器會社　西いわを報
席題　寢言　互選
逢曳に寢言の癖を不安がり　梅子
寢言にも眞劍味あり蜻蛉釣り　青兒
枕蚊帳つれと遊んでゐる寢言　艸樂
席題　嫉妬　艸樂選
お茶碗に思はず嫉妬の音がする　品子
本妻の妙にやさしく肌寒い　梅子
岡燒きの「コン畜生」は石をけり　同
たまさかの嫉妬もほしい酒を飲み　青兒
扇風器を背に嫉妬聞き流し　夢裡
席題　怪談　艸樂選
怪談は話題を轉じお茶を飲み　青兒
怪談に怖氣が立つた歸り道　夢裡
怪談に浴衣の襟を合すなり　品子
怪談をきつかけにして兒を寢かし　晤裁
怪談に團扇もしばし動かさず　同
小平次がカルピスを飲む舞臺裏　梅子
逢ひたいしこほいし新三郎は痩せ　同
（軸）怪談の窓へ月の着白ろく　艸樂
兼題　開襟
肥滿して開襟シャツで往來し　品子
開襟へ青年らしい意氣を見せ　晤裁
買足しに來てオープンは座り込み　いわを
開襟は俳優の名知つてゐる　青兒
オープンのステップも輕し濱の風　夢裡

川柳雜誌社　**松江市公會堂句會**（島根）

七月十八日　水鄕祭の夜　山川兒居、
兼題　退屈　專太郎選
退屈な男戀文讀まされる　庄介
退屈が生む情熱の一夜なり　山川兒
退屈な耳へ茶碗の割れた音　天痴人
兼題　波
水泳着の乳房が小波吸ひ寄せる　天痴人
波がきらひなマダムは脂肪過多　莞路
大波が水平線を持ち揚げる　春朗
席題　レツテル　天痴人選
レツテルの悪い女給は金を貯め　春朗
メイドインニツポン玩具の舶の腹同
レツテルをすらり西瓜の市が立ち　柳人
席題　花火　巷二選
傷ついた心花火のあつけなし　莞路
屋根越に花火を見てる四疊半　山川兒
宍道湖の閣の深さに花火消え　天痴人
別莊の二階花火へ靜かなり　同
席題　貯金　春朗選
昇給のそれから貯金減つて行き　登美也
母として小さな金を貯めてゐる　山川兒
三度目は引出しに來た貯金帳　夢迷
屈辱は貯めて復讐すると云ふ　莞路
銀行で野良着貯金を見直され　天痴人

席題　萬年床　　莞路選

まあ座れ萬年床を隅に寄せ　專太郎
兄弟子が萬年床に慣れさせる　同
國の父萬年床を慌てさせ　山川兒

席題　疲れ　　笑鬼選

野の果へ夕日疲れた色になり　天痴人
疲れ切る瞳に映つた流れ星　比呂志
招き猫妓の疲れた足を見る　讓二
生活に疲れ現狀維持主義者　莞路

席題　馬　　互選

馬の顏呑氣な人とうつされる　巷二
太陽は馬の疲れを遠慮せず　比呂志
朝風へ馬直線に砂を蹴り　天痴人

川柳雜誌社 高知句會（高知）

七月廿一日　於ブラジル樓上　國澤春水報

席題　西瓜　　春水選

西瓜割る手附美味しいのを信じ　水魚
赤いとこ一とこ乘せた西瓜賣　濁水
西瓜もう冷えて歸らぬ父を待つ　水魚
隣から庖丁を借る大西瓜　濁水
西瓜一つ提げて家内の里遠し　水魚
ひよいと浮きひよいと隱れる西瓜奪　濁水
(軸)犯罪のやうに西瓜の皮を捨て　春水

席題　金魚　　水魚選

水替へた金魚しばらく見直され　濁水
金魚々々お伽噺のやうに浮き　春水
(軸)金魚瓶お前は德な生れ合ひ　水魚

席題　軍艦　　松翠選

軍艦の名前を母も覺えて來　水魚
(軸)日本を守る軍艦兄が居る　松翠

席題　事故　　濁水選

運轉手善後策から詫びはじめ　水魚
不時着で機體いためた早廻り　松翠
まだ着かぬ汽車に驛長の不安顏　同
(軸)親友の危篤案じる汽車の事故　濁水

川柳雜誌社 簸川支部 大地吟社句會（島根）

盛夏八月、水銀柱は九十度の線上を彷徨すると云ふ暑さの一日、午後三時より當吟社では市街の暑を避け涼風吹き入る市外華村居にて納涼を兼ねたる意味で例會を開いた。

傘題　蠅、蟬、水　　絲之助選

蟬と松林療養所は右の道　朴泉
病宅の蠅は靜かに叩かれる　四十雀
午睡の夢を蠅がぬすんでた　美津彌
水際に待てばぼんやりぬれて居る　華村
灯に水に夏の夕べのいゝ松江　田鶴緒
急用はヒシヤクの水を飮んで云ひ　美津彌
水すまし小さな戀もして居ます　凡愚
水鄕へポッポは歸る月明り　大郎

席題　サーカス　　華村選

サーカスの女王果敢ない思ひ事　絲之助
サーカスの明りへ星が散つて行き　朴泉
サーカスの樂屋に淋しちびた下駄　凡愚
曲藝の刹那に浮ぶ父母の顏　田鶴緒
曲馬の娘身の上話がしたそうだ　絲之助

席題　汗、夜道　　共選

大汗に絹ハンカチの頼りなき　絲之助
勞苦を忘れて夕の汗を流しませう　朴泉
祖父の汗父の汗知らぬ三代目　四十雀
尺八の音は冴えて居る夜途ゆく　朴泉
夜の道女の瞳がふとあわて　凡愚
悲しき便り握つて急ぐ夜の道　華村
青春の物憂さ捨てに夜の道　田鶴緒
小走りに歩く夜道を下駄の音　絲之助
青春のセンチ夜道の思ひ事　同

川柳雜誌社 松山十日會（愛媛）

八月十日　會場　晴朗食堂階上

席題　橋　　克海選

名殘まだ盡きず橋まで來てしまひ　拓水
二日醉ひ橋を渡つたまでは知り　大觀
非常線ヤッパリ橋で引つかゝり　五健
絕景は丸木の橋を渡らされ　耕一路
待呆けだん〳〵橋の寒くなり　五健
御粗末の橋へ少年等の美談　大樓
二重橋最敬禮をするところ　靈子
(軸)沈默の橋が見て居る水爭議　克海

席題　奮起　　互選

あの時の侮辱が今日の己にする　拓水
立志傳奮起の時のはした錢　五健
奪起した時は一文なしだつた　靈子
厥然と立ち日本人こゝにあり　五健
國を血で護る覺悟のエチオピヤ　大樓
見込まれた奮起に學資貸して呉れ　松葉
奮起さす妻は事の後を押して　同
捨てられた女の意地へ強く生き　晴朗
奮起して南洲翁の額の文字　耕一路

席題　佛事　　互選

極樂ときめて佛事の華やかさ　五健

水菓子のみづ〳〵しさも一週忌　靈子
不運から不運が續く三週忌大樓
落ちぶれた同志法事の隅に寄り克海
お法事にだけは母家の格で來る　同

川柳雜誌社**松江句會**（島根）

八月十四日夜　於山川兒居
席題　墓掃除　　祥月　選

墓掃く心境へ落日　都之介
墓掃除みゝず異變と覺えたり柳人
遠からず吾もと告げて墓を洗ふ　都之介
席題　直線　　山川兒選

アメリカへ直線をひく海軍省巷二
直線の愛を裏切る二皮眼祥月
直線のコース不運にけつまづき　同
ひとすじに惚れぬよろけぬ平太なり　都之介
席題　化石　　都之介選

黃昏へ化石に似たるトラピスト山川兒
傷心の化石となりて金を貯め莞路
化石に聞けば拜金主義になれと云ふ　柳人

川柳雜誌社**つどひ**　第廿七回（大阪）
席題　勇　　姫田夕鐘報

勇ましい聲に壺湯もたぎるなり水車
勇ましい姿と別にバスにゆれ　同
勇ましく斬られただけで役がすみ　同
勇ましき子の軍服へ母の指　夕鐘
勇ましき肩の巾から譽めちぎり　同
水上日本
勇ましさ水の王座をゆるがせず　同

浪花座觀劇句會（大阪）
七月六日　　水谷鮎美報
四ッ谷怪談

怪談の障子白ろじろ風があり　つばき
怪談のときどき氷汲む音をさせ　同
早變り行燈は消へてしまふなり鮎美
伊右衛門を斬る右團治の早變り　同

ひかり集（その二十一）
まごゝろ　　水谷鮎美報

まごゝろのまゝにかぼそき指のつや　ト居
まごゝろへ水はつめたくすみあたり　鮎美

水車氏を圍みて（大阪）
七月廿七日　族カナメ喫茶店
題　友達　　奥野禿山報

友達はみんな裸になつて呑み　禿山
友達へ後は頼むと母のこと　雅彦
友達を淋しがらせる金使ひかほる
絶交のあした友達訪ねて來　艸樂
友達のたつた一人が合格し　里十九
友達の醉ふた姿もうれしくて　同
やあ、やあ、やあ、友達はそれで良し　同
友達と呼ぶには高い椅子となり水車
友達の趣味思ひ出す土產物　同
友達の肩の向ふに居る笑顏　同
友達のこんな所で顏が利き　同
案外な同伴がある友と會ひ　同
戒橋迷惑さうな友と會ひ　同

各種旗
七寶徽章
メダル
カップ

川柳雜誌指定
大阪上六
加藤旗店

編輯の窓

汀柳

▲句の秋になりました。本號から多年懸案である全頁にポイント新活字の採用と大增册を斷行した。斯くするためには相當な犧牲と努力とが拂はれたもので一朝一夕で出來る改革問題ではなかつたのである。それを、この際敢然として斷行し併せて編輯體裁の改善をも行つた事は一目してお氣づきのことと思ひます。然しそれがために多少の遲刊は免がれなかつたが、この大きなお土産でお宥し願へるものと信じてゐる。

▲一步一步大きくそして力强い足跡を印して伸びてゆく本社の躍進ぶりは實にめざましい、路郎主幹初め同人一同ここもと大車輪である。從つて愛讀者諸君の層一層の御援助を切に希つてゐる。

▲句作の秋に入つて本社句會の柳珍堂忌、柳翁忌を別項の通り盛大に催すのと、今月より大阪朝報大阪夕刊新聞の二柳壇の句會も本社後援の下に行ふ樣になつた更に本社支部の松江、松山、今治等の川柳大會も發展されて柳界いよ〳〵多端である。諸君の健吟を祈つて倦まない。

▲日本名所名物川柳は前號に發表した通り、「四國の卷」を加え選を前田五健氏に、書を原田一風君にお願ひする事となつた「東京の卷」の書は宮尾しげを氏御多忙の爲め次回よりは漫畫家小川武氏を煩はす事となつてゐる。

▲月末の慌しい中を僕は子供に東京見物をせがまれたのと、他に用件もあつたので東上した、在京同人の山雨樓氏に寸暇を得て會談社務打合をしたのみで、東京の川柳家諸氏にはお言葉もかけず失禮して歸つた。次回は十月末の明治神宮體育大會に雨迷君と一緒に一週間程の豫定で滯在する事となつてゐるので其節は必ず拜眉を念願してゐる。

▲路郎主幹は展望欄にも揭げた通り、來る二十二日夜の柳翁忌に際して行はれる「川柳放送の夕」にBKより講演をされるが本社句會柳翁忌にも放送後勿論出席される事となつてゐる。主幹は社務多忙の中、短文ながらも卷頭に執筆され、いよ〳〵健在に活躍をされてゐるのは嬉しい。

▲表紙寫眞は路郎主幹の最近影で假寓玉出の孔子園で撮られたもの、秋の香が庭一ぱいに感じられてゐるが、眞紅な葉雞頭の美しさが表はれてゐないのは殘念でもある。

阪大川柳句會
大川端
麻生路郎序
丸島利生編
御希望の方に實費頒布(一部一圓)
川柳雜誌社事務所にてもお取次致します。——殘部僅少——
發行所
不朽洞
大阪市西成區玉出本通三丁目三六
電話天下茶屋二五七九
振替大阪三〇三九二

川柳雜誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行増すごとに金十錢(但し前金切手代用可)改號、移轉、句會案内、柳書廣告、その他

並製 **合本特賣**

「川柳雜誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**
大阪 市内送料壹册六錢
市外送料壹册廿四錢

大阪市天王寺區上汐町一丁目五二
川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「稽古」 路郎選
九月十日締切

その他雜吟を募る

▼**用紙** 官製**ハガキ**(化粧柳壇と明記の事)
▼**賞品** 秀逸數句薄謝を呈す
▼**投吟所** 大阪市玉出本通三ノ三六
麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁
毎月一日發行一部廿五錢
東京豐島區高田本町二ノ一
四六八 川柳きやり吟社
(取次所)川柳雜誌社事務所

紀南柳壇

選者 麻生路郎氏

山 五句
〆切 九月二十日

大阪市西成區玉出本通三ノ三六
麻生路郎氏宛

朝報柳壇

選者 増位汀柳

題「寺」〆切九月十五日
題「火鉢」〆切九月三十日
雜吟は〆切なし、用紙ハガキ

大阪市天王寺區上汐町一丁目 増位汀柳宛

毎日必ず川柳の記事が出てゐる大阪朝報をお讀み下さい。(一ヶ月五十錢、郵税共六十五錢)

川柳雜誌
投句用箋

本社制規の投句用箋を左の通りでお頒ち致します、投句にはなるべく此用箋を御使用下さい。

五十枚綴 一冊 金拾貳錢
(送料共)

▲御申込は本社事務所へ(切手代用も可)

殘暑御伺

水のお見舞に怠け、地震のお見舞をいたゞき恐縮してをります。

靜岡市寺町四丁目
靜岡川柳會
榎田珍竹林
柳葉女
孝坊

川上三太郎主宰
(毎月一回發行)

川柳研究

一册金廿錢
半年金一圓
一年金二圓

異色ある本誌の創作欄と初心者への入門欄をアナタは絶對に見逃してはいけません

見本希望者は二錢切手十枚同封左記へ

發行所 東京市王子區上十條町八五〇
川柳研究社

光耀句會 九月例會

場所 キング喫茶室
南海線玉出驛下車本通十五間道路北ノ辻西入

日時 九月廿日(金曜日 午後六時半

兼題 「釦」「他人」
各種十句以内

會費 參拾錢(遠方の方の兼題に投句歡迎)

主催 川柳光耀會
幹事 竹内機見女

川柳雜誌社關係の人々

（いろは順）

賛助員

池澤樂居
長谷川一徹
大道弘雄
岡本一平
片岡直方
笠原踏生
嘉納純
田中辰二
長崎柳秀
長岡半太郎
長野晴濱
國枝史郎
藤村作
藤本卯之助
額原退藏
赤井清司
淺田一

客員

末弘嚴太郎
伊藤彦造
鳥山一歩
大島濤明
大谷五花村
大西長三郎
岡田三面子
龜井晟修
川上三太郎
川村花菱
米村あん馬
田村孝之介
谷脇素文
窪田銀波樓
安川久流美
前田雀郎
前田五健

同人

食滿南北
柴谷宰二郎
篠原春雨
蛭子省二
藤里好古
小林不浪人
森東魚
岩崎柳路
石曾根民郎
市場沒食子
原史風
長谷川三汀
西いわを
西村山月
西村明珠
大鶴喜由
大西八歩
奧野禿山
丘遊舟

岡田茱人
吉田水車
吉川啞人
立井登美坊
中西おさむ
中澤濁水
村松夢裡
熊谷紅
松下小柳子
福田鶴峰
朝田新水
近藤勇
後藤青兒
江戸みつる
阿形一杉
明石柳次
青木史史
眞田幸捐
笹田角丸
北山悟郎

喜多春秋
宮岡白峰
三輪夏曉
水谷鮎美
芝四葉
清水友帆
平井蒼太
平井春光
平井與三郎
姫田夕鐘
日野華水
東谷聞路
廣田六浦
毛利九波
妹尾變人
須崎豆秋
首藤竹楓

同人

生田翠夢

春元紀太
高橋かほる
永田里十九
山本丹路
阿部閑生
關本雅幽
庄萬よし

編輯局（同人）

橋本緑雨
西田艸樂
山本雨迷
增位汀柳
福田山雨樓
麻生葭乃
住田亂耽

主幹

麻生路郎

道頓堀支部（大阪市）幹事　庄万よし
九三會支部（大阪市）幹事　北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事　首藤竹楓
函館支部（函館市）幹事　龜井晟修
高知支部（高知市）幹事　國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事　水谷鮎美
螢ケ池支部（大阪府）幹事　米田まさる
田邊支部（和歌山）幹事　辻左馬
簸川支部（島根縣）幹事　尼緑之助
京都支部（京都市）幹事　平岩司郎
鳥取支部（鳥取市）幹事　中島鐵州

堺支部（堺市）幹事　八木美夜路
松山支部（松山市）幹事　石丸晴朗
御旅支部（大阪市）幹事　生田翠夢
天王寺支部（大阪市）幹事　須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事　宮岡白峰
御池橋支部（大阪市）幹事　西いわを
松江支部（松江市）幹事　田中都之介
塗青支部（大阪市）幹事　熊谷紅
大鐵局支部（大阪市）幹事　植山九天
西條支部（愛媛縣）幹事　荒井英賀夫
光耀會（大阪市）幹事　竹内機見女

住吉支部（大阪市）幹事　奧野禿山
今里支部（大阪市）幹事　市場沒食子
玉造支部（大阪市）幹事　清水友帆
今治支部（今治）幹事　曾我部宵明
光笑會（大阪市）幹事　永田里十九
新居濱支部（愛媛）幹事　高橋白羽
伯耆支部（鳥取）幹事　三鴨美笑
竹原支部（廣島）幹事　町田承春
簸川第二支部（島根縣）幹事　加藤健芳
行人會（大阪市）幹事　平井春光

投稿規定

▲投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は同人に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は嚴守されたし。

▲投稿其他につき御問答はすべて返信料封入の事。

募集

第十二卷第十一號課題

九月五日締切（各題十句以內）

▼指　西田卯樂選

▼雫　喜多春秋選

第十二卷第十二號課題

十月五日締切（各題十句以內）

▼マスク　關本雅幽選

▼內職　尼綠之助選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切は事務所宛

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▲御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます▲送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも預ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▲御注文には何月號よりと御指示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▲川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年八月廿五日印刷
昭和十年九月一日發行　第十二卷第九號（每月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸二郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所　川柳雜誌社
電話天下茶屋二五七九番
大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地
事務所　川柳雜誌社
電話南六四四番
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

賣捌書店

（大阪）大寶捌大寶社書店—明文堂　其他市內各書店—（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店　玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戶）米田、寶文館（函館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十年八月十五日印刷納本昭和十年九月一日發行

川柳雜誌（第一四〇號）

定價金參拾錢 送料壹錢

清酒

句の秋・酒の秋

白鶴が緣とはなりぬ君と僕
よろこびに添へて白鶴届けとき
白鶴の方に幹事は極めちまひ
母親も白鶴ならと一つ受け
白鶴をいつもきらさぬくらしむき

攝津灘

嘉納合名會社釀